

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集

東蒲池榎町遺跡

福岡県柳川市東蒲池所在遺跡の調査

2005

福岡県教育委員会

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集

東蒲池榎町遺跡

福岡県柳川市東蒲池所在遺跡の調査

序

福岡県教育委員会では国土交通省九州地方整備局の委託を受け、平成15年度に、有明海沿岸道路大川バイパス建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。現在、平成19年度供用開始を目指して工事が進められており、今後、発掘調査も増えるものと思われます。

これまで柳川市内は発掘調査が実施される機会が少なく、近世については絵図等である程度の状況がわかりますが、それ以前の様相はほとんどわかっていません。このような中で、発掘調査の機会に恵まれたことを大変意義深く感じています。

東蒲池榎町遺跡では、弥生時代から江戸時代までの土坑、井戸、溝などが確認されました。古くから弥生土器等の土器が採集されていた西蒲池地区の東南にあたり、集落の縁辺部であることがわかりました。おそらく西蒲池地区が集落の中心部になるものと推測されます。

本書が教育・研究、文化財愛護思想の普及の一助になれば幸いです。

発掘調査、整理作業ならびに報告書作成にあたり、多くの方々にご協力いただきましたことを、深く感謝いたします。

平成17年3月31日

福岡県教育委員会教育長
森山 良一

例言

1. この報告書は、平成 15（2003）年度に福岡県教育委員会が国土交通省九州地方整備局の委託を受けて実施した有明海沿岸道路大川バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財の発掘調査記録で、有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第 1 集である。
2. 本書に掲載した東蒲池榎町遺跡は有明海沿岸道路大川バイパスの埋蔵文化財発掘調査第 7 地点にあたり、柳川市東蒲池に所在する。尚、平成 16 年 3 月 21 日をもって、新柳川市が発足しているが、本文中の柳川市は旧柳川市を指す。
3. 本書に掲載した遺構写真は今井が、遺物写真は北岡伸一が撮影し、空中写真は九州航空株式会社に委託した。
4. 本書に掲載した遺構図は今井が実測し、荒巻静美、古賀富士子、江口加代子、原秀美の協力を得た。
5. 本書で使用した方位は、国土調査法第Ⅱ座標系に基づく座標北である。
6. 出土遺物の整理・復元作業は坂元雄紀の指導のもと、九州歴史資料館で行った。
7. 出土遺物の実測は今井のほか、田中典子、橋之口雅子、中川真理子、栗林明美の協力を得た。
8. 遺構、遺物の製図は今井のほか、豊福弥生、原カヨ子、江上佳子が行った。
9. 本書の執筆は今井が行った。

本文目次

第1章	はじめに	1
	Ⅰ 調査にいたる経過	1
	Ⅱ 調査の組織	2
第2章	位置と環境	4
	Ⅰ 地理的環境	4
	Ⅱ 歴史的環境	9
第3章	調査の記録	13
	Ⅰ 遺跡の概要	13
	Ⅱ 遺構と遺物	13
第4章	おわりに	42

図版目次

図版 1	調査区全景 (空中写真 右が北 合成)
図版 2 (上)	調査区遠景 (西を望む)
	(中) 1号土坑 (東から)
	(下) 2号土坑 (東から)
図版 3 (上)	3号土坑 (東から)
	(中) 4号土坑 (東から)
	(下) 5号土坑 (北から)
図版 4 (上)	6号土坑 (東から)
	(中) 7号土坑土層
	(下) 7号土坑 (東から)
図版 5 (上)	8号土坑 (南から)
	(中) 9号土坑 (北から)
	(下) 10号土坑 (北から)
図版 6 (上)	11号土坑 (北から)
	(中) 12号土坑 (東から)
	(下) 13号土坑 (北から)
図版 7 (上)	14号土坑 (北から)
	(中) 15号土坑 (北から)
	(下) 16号土坑 (南から)

図版 8 (上)	17号土坑 (東から)
(中)	18号土坑 (東から)
(下)	19号土坑 (東から)
図版 9	土坑出土土器
図版 10	土坑・溝・堀跡・包含層出土土器
図版 11	出土石製品①
図版 12	出土石製品②

挿図目次

第 1 図	海岸推定線と周辺遺跡位置図 (1/62,500)	5
第 2 図	調査区周辺字図・遺物散布地位置図 (1/7,500)	8
第 3 図	遺構配置図 (1/300)	折込
第 4 図	基本土層図 (1/40)	13
第 5 図	1～7号土坑実測図 (1/40)	11
第 6 図	1・4・5号土坑出土土器実測図 (1/3)	15
第 7 図	7号土坑出土土器実測図① (1/3)	16
第 8 図	7号土坑出土土器実測図② (1/3)	17
第 9 図	8～12号土坑実測図 (1/40)	19
第 10 図	8・9号土坑出土土器実測図 (1/3)	20
第 11 図	11号土坑出土土器実測図 (1/3)	21
第 12 図	13～19号土坑実測図 (1/40)	23
第 13 図	13・17号土坑出土実測図 (1/3)	24
第 14 図	18・19号土坑出土土器実測図 (1/3)	26
第 15 図	20号土坑実測図 (1/40)	27
第 16 図	1号溝土器出土状況・断面土層図 (1/40)	28
第 17 図	1・2・5～8号溝出土土器実測図 (1/3)	29
第 18 図	10号溝出土土器実測図 (1/3)	31
第 19 図	溜り状遺構出土土器実測図 (1/3)	32
第 20 図	堀跡土層図 (1/40)	33
第 21 図	堀跡出土土器実測図① (1/3)	35
第 22 図	堀跡出土土器実測図② (1/3)	37
第 23 図	ピット・包含層出土土器実測図 (1/3)	38
第 24 図	石製品実測図① (1/2)	40
第 25 図	石製品実測図② (1/2)	41
第 26 図	石製品実測図③ (1/2)	42

第1章 はじめに

I 調査に至る経過

有明海沿岸道路は、大牟田市を起点に佐賀県鹿島市に至る延長約55kmの地域高規格道路である。三池港、佐賀空港などの広域交通拠点および大牟田市、柳川市、大川市、佐賀市、鹿島市など有明海沿岸の都市間を連結することにより、地域間の連携、交流促進を図るとともに、一般国道208号等の交通安全の確保を目的として計画された。福岡県内部分は延長約29kmで、大牟田高田道路、高田大和バイパス、大川バイパスの3事業が推進されている。このうち大川バイパスは、山門郡大和町徳益から大川市大野島までの延長10kmの区間で、平成5（1993）年度に事業化、平成12（2000）年度に延伸部分が事業化されている。現在、大牟田I.C.から大川西I.C.までの延長23.8km区間について、平成19（2007）年度供用開始を目指して事業が進められている。

この有明海沿岸道路建設に先立ち、建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所（現 国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所 以下、福岡事務所）より、平成2（1990）年10月22日付「一般国道208号高田大和道路の埋蔵文化財の分布調査について」との調査依頼があった。同年3月に福岡事務所、福岡県教育庁指導第二部文化課（現 総務部文化財保護課 以下、保護課）で、建設予定地内を踏査の結果、「新開村旧隄記碑（しんかいむらきゅうていきひ）」（県指定文化財昭和30（1955）年指定）が予定地内に含まれること、「江越八幡海岸燈台」、「慶長本土居跡」（ともに大和町指定文化財昭和53（1978）年指定）が近接していること、一部試掘調査が必要な箇所があることなどが確認された。平成3（1991）年4月11日付「一般国道208号高田大和道路埋蔵文化財分布調査について」、12月19日付「一般国道208号高田大和道路予定地の文化財について」で、その旨回答している。

協議の結果、建設予定地の半分程度は干拓地であることを踏まえ、発掘調査以前に干拓関係文献資料の調査を実施することとなった。調査は平成3・4年度に柳川古文書館が行い、平成6（1994）年に報告書が刊行されている。

福岡事務所より、大牟田高田道路、高田大和バイパス、大川バイパスの全路線について、平成12年11月16日付「一般国道208号有明海沿岸道路建設に伴う埋蔵文化財について」で照会があった。これに対し、平成13（2001）年2月19日付「一般国道208号有明海沿岸道路建設に伴う埋蔵文化財等について」で17地点に文化財が存在する旨、またこれ以外にも文化財の存在が予測される地点について試掘、確認調査等、別途協議が必要な旨を回答している。以後、用地を取得次第、随時協議を行い、試掘、確認調査を実施している。

さて、この17地点の内には先述の「新開村旧隄記碑」や同じく県指定史跡「黒崎堤防」（平成15（2003）年指定）など旧柳河藩干拓事業に関する遺跡、三池炭鉱三川坑跡など近代化遺産が含まれている。これらの取り扱いについては、福岡事務所ならびに関係市町村教育委員会と随時対応を協議している。現在のところ、「新開村旧隄記碑」は移設保存のため記録を取って解体しており、工事の進捗状況をみて設置の予定である。「黒崎堤防」は沿岸道路が堤防本体を乗り越える計画になっているが、軽量盛土で堤体を保護し、掘削範囲が最小限になる工法を採用している。大牟田市に所在する三池炭鉱三川坑跡、三池炭鉱専用鉄道跡、三井化学横須工場については、平成14年度から大牟田市教委が福岡事務所の委託を受けて調査を実施しており、本年度報告書を刊行する予定である。

さて、平成14(2002)年9月上旬に柳川市大字矢加部から大川市井出堀間の試掘調査を実施し、遺構が確認された約6,000㎡を対象に発掘調査を行った。平成15(2004)年10月5日に発掘調査に着手、平成16(2003)年3月26日に埋め戻しを終了し、調査を完了した。有明海沿岸道路建設予定地における発掘調査はこれが初めてである。

以下に調査日誌を抄録する。

平成15(2003)年

10月5日 西区、重機による表土剥ぎ開始
11月5日 機材搬入、環境整備
11月12日 排水溝掘削、遺構検出開始
11月18日 遺構検出と並行して遺構掘削開始
12月26日 仕事納め

平成16(2004)年

1月7日 仕事始め
1月8日 空中写真撮影のための清掃開始
1月9日 重機による反転作業開始
1月14日 空中写真撮影
1月20日 西区、平板測量開始
1月27日 東区、遺構検出・掘削開始
1月30日 西区、平板測量終了
2月19日 東区、1/20実測図作成開始
3月3日 空中写真撮影のための清掃開始
3月10日 空中写真撮影
3月11日 重機による埋め戻し開始
3月12日 機材撤収
3月16日 東区、実測終了
3月26日 埋め戻し終了

II 調査の組織

発掘調査および報告書作成の関係者は以下のとおりである。

国土交通省九州地方整備局福岡工事事務所

	[平成14年度]	[平成15年度]	[平成16年度]
所 長	森 昌文	増田 博行	増田 博行
副 所 長	小串 正志	小串 正志	後田 徹
	百田 国広	徳留 忠	徳留 忠
建設監督官			松尾 淳一郎

調査第2課長	久野 隆博 上村 一明	上村 一明	小椎尾 優
調査係長	大榎 謙 長友 浩信	長友 浩信	長友 浩信
専門調査員			相島 伸行
国土交通技官		築瀬 純矢	築瀬 純矢
工務課長	末岡 彰	田中 秀之進	田中 秀之進

福岡県教育庁総務部文化財保護課

	〔平成14年度〕	〔平成15年度〕	〔平成16年度〕
総 括			
教 育 長	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教 育 次 長	三瓶 寧夫	三瓶 寧夫	清水 圭輔
総 務 部 長	松本 通憲	清水 圭輔	中原 一憲
文化財保護課長	井上 裕弘	井上 裕弘	井上 裕弘
参事兼課長補佐	久芳 昭文	久芳 昭文	
参事兼課長技術補佐	橋口 達也 川述 昭人	川述 昭人 木下 修	川述 昭人 木下 修
参 事			新原 正典
課 長 補 佐			安川 正郷
参事補佐兼管理係長	古賀 敏生	古賀 敏生	
参 事 補 佐 兼	佐々木隆彦	小池 史哲	小池 史哲
調査第一係長			
参 事 補 佐 兼	児玉 真一	中間 研志	中間 研志
調査第二係長			
庶 務			
管 理 係 長			稲尾 茂
主 任 主 事	秦 俊二	末竹 元	石橋 伸二
調査・報告			
主 任 技 師	秦 憲二 (試掘調査)	今井 涼子 (発掘調査)	今井 涼子 (報 告)

発掘調査にあたり、柳川市教育委員会の堤伴治氏、三橋町矢加部区長の野田信也氏、鹿島区長の與田末善氏、京手団地区長の横山雅尚氏、J A柳川蒲池支所長中村博文氏には大変お世話になった。

発掘作業に尽力くださった方々、調査の経過を温かく見守っていただいた近隣の住民の方々、記して感謝いたします。

第2章 位置と環境

I 地理的環境

本遺跡が所在する柳川市は、筑後平野の南西端に位置し、北は大川市、三潞郡大木町と、東は山門郡三橋町、大和町と、西は筑後川を挟んで佐賀県と境を接し、南は有明海に面する。総面積37.23k m²、人口41,783人(12,905世帯)の市である。

筑後平野南部は、有明海沿岸部の海退地形に九州随一の大河筑後川が運ぶ大量の土砂が堆積して形成されたいわば広大な三角州で、九州最大の軟弱地盤である。筑後川の河口に位置する柳川市はまさにこの三角州上にあたり、はるか東方に筑肥山地がおぼろに見えるのみで目立った地形の変化はなく、標高10m以下の極めて低平な土地である。

筑後川のほかに、矢部川の支流沖端川が市のほぼ中央を、同じく塩塚川が大和町との境をなしながらともに南流する。それぞれの河川の河口付近には干潟が発達し、河口に近いほうから泥質、砂泥質、砂質と質の変化を伴う。同じ有明海沿岸でも、有明海全体の潮流の影響で、北西岸の佐賀県鹿島や長崎県諫早の干潟は泥質である。

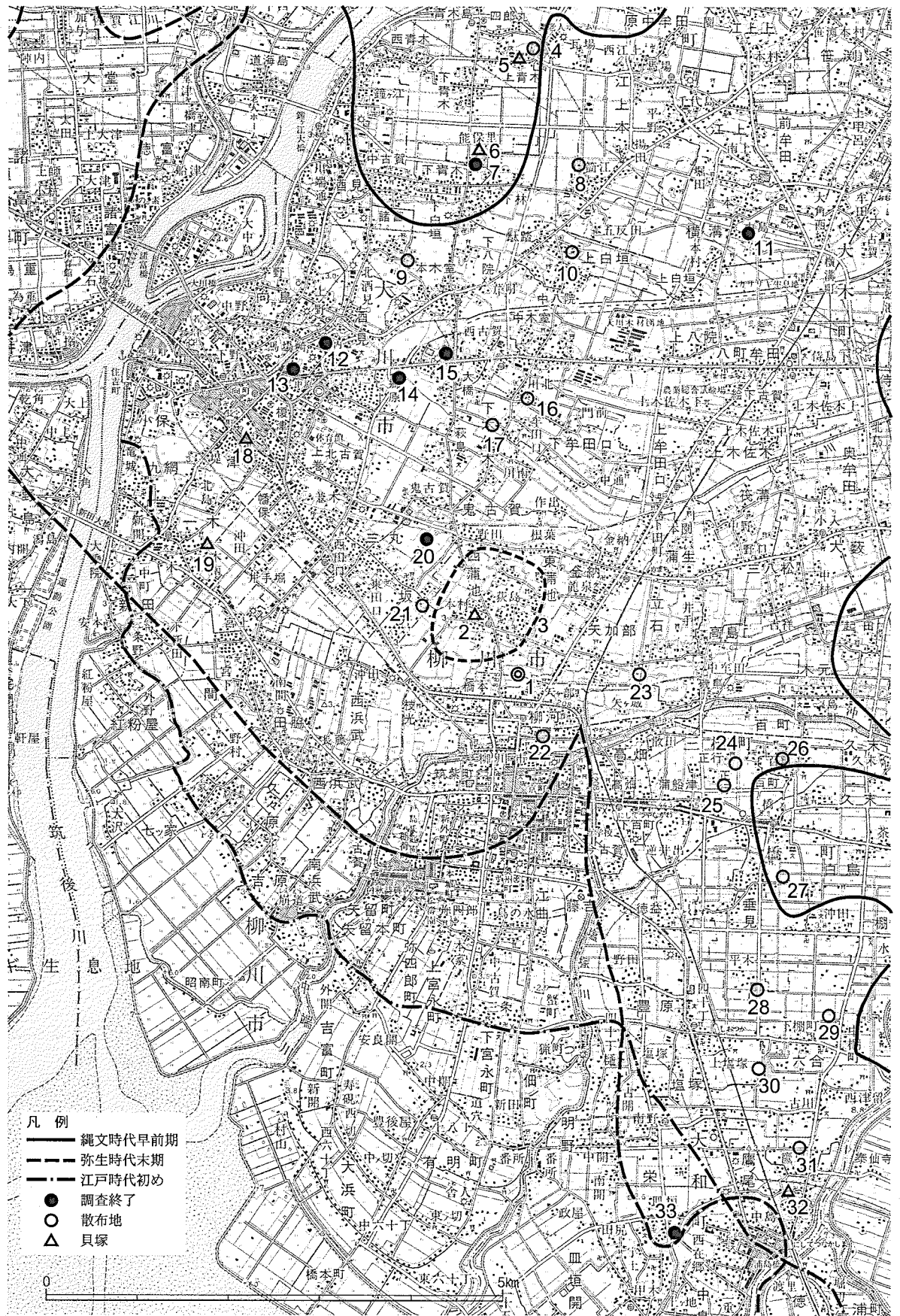
有明海はよく知られているように干満の差が非常に大きく、満潮時は河口付近の潮流が強い。そのため海水が淡水と比較的早く混じりあい、海底にたまった泥土を巻き上げながら上流へ逆流する。川岸が干潟のような様子をしているのは、押し流されてきた粘土の堆積による。逆流する際に海水と淡水が混合して希釈されるためこの泥土は塩分をほとんど含まず、これを非海成粘土という。

さて、柳川市を含む有明海沿岸部の地盤を形成する粘質土には2種類ある。海成粘土と、その上層に堆積する先述の非海成粘土である。下山正一氏によれば、この2種の粘土の表層での分布域から海岸線の位置をある程度推測することが可能である。第1図に下山氏の示した海岸推定線と主だった遺跡の位置を示した。註1

この図によれば本遺跡は市内で陸地化が最も早かった地域に含まれている。弥生時代中期の遺構、遺物が確認されており、周辺でも多くの弥生土器等が採集されていることから、蒲池地区は弥生時代中期には陸地化しており、居住が可能な安定した状態であったと考えてよいだろう。

下山氏は、筑後国主田中吉政が慶長7(1602)年までに築いたという慶長本土居を江戸時代初期の海岸線にあてている。一部、弥生時代末期の推定線が江戸時代初期の推定線をはみ出しているが、葦原など未利用の湿地が何らかの理由で潮止堤防外に残されたと解釈されている。この江戸時代初期の海岸推定線から南に広がる土地は全て、本格的な干拓事業で得られた土地である。圃場整備が行われ区画が直線的になってはいるが、堤防や水路に囲まれたひとまとまりの水田が鱗のように並んで海へ向かって続いており、干拓によって徐々に耕地が拡大された様子が看取できる。柳河藩主立花氏の居城、柳川城とその城下町は市のほぼ中央を占める。今でこそ海岸から5kmほど内陸になるが、築城当初は有明海を臨む位置だったのである。

城下に限らず、柳川市内には網の目のように堀が巡っている。水郷柳川の名の所以である。柳川城下の堀割は、慶長年間に田中吉政が柳川城の築造とともに、防御用に大改修したといわれている。矢部川、沖端川、花宗川、二ツ川などから水を引き、城下を巡った後は沖の端川へと排水される。城下に住むものにとっては灌漑用水、生活用水また飲料水でもあった。井戸を掘っても塩水しか湧かない場所が多いため、堀割に面した家はどこも汲み場をもっていた。今もその名残を留めている家は多い。



- | | | | | |
|-------------|-----------|------------|------------|------------|
| 1 東蒲池榎町遺跡 | 8 山ノ下遺跡 | 15 内平原遺跡 | 22 南天ヶ部遺跡 | 29 下棚町遺跡 |
| 2 三島神社貝塚 | 9 諸富遺跡 | 16 下木佐木遺跡Ⅱ | 23 阿弥陀屋鋪遺跡 | 30 散田遺跡 |
| 3 西蒲池散布地集中域 | 10 東屋敷遺跡 | 17 下木佐木遺跡Ⅰ | 24 將軍塚遺跡 | 31 鷹尾中島遺跡 |
| 4 宮開遺跡 | 11 横溝中島遺跡 | 18 津村貝塚 | 25 正行遺跡 | 32 島貝塚 |
| 5 上青木貝塚 | 12 酒見貝塚 | 19 宮の後貝塚 | 26 中村遺跡 | 33 江越八幡宮灯台 |
| 6 能保里貝塚 | 13 西水町遺跡 | 20 北大境遺跡 | 27 垂水遺跡 | |
| 7 下林西田遺跡 | 14 郷原北田遺跡 | 21 園田遺跡 | 28 平木遺跡 | |

第1図 海岸推定線と周辺遺跡位置図(1/62,500)

江戸時代、掘割は防御を主目的としたため公的な橋が少なく、移動の際には小船が多く利用された。掘割に面した家にとって、小船は生活に欠かせない家財道具であった。船の競争やお月見などの川遊びが盛んに行われるようになったのは、明治に入ってからである。

現在では水郷柳川を象徴する風景となった川下りは、映画『からたちの花』で川遊びが注目されたことを契機に、昭和31(1955)年ごろに始まったものである。

城下以外の地域でも堀は共同利用し、呼び名がつけられていた。今も通称にその名をとどめる堀がある一方で、圃場整備や道路網整備で多くの堀が統廃合され、姿を消しつつある。堀の名を含む地名について柳川市史編集委員会が調査を実施し、報告書を刊行している。註2

堀は本来、農業用の用排水、地域全体の排水を主たる目的として掘られたものである。柳川市は筑後川と矢部川に挟まれ、一見水に不自由しないように感じられる。しかし、筑後川は川底が低く、直接田に水を引き入れることができない。そのため有明海の干満の差を利用した淡水(アオ)取水という独特の取水方法が取られてきた。これは、満潮時に遡上してくる海水に押し上げられ逆流してくる淡水を樋門やポンプで取水し、堀に貯留するものである。取水時間に制約を受け、安定的な水源とはとてもいえない。

一方、矢部川は天井川で取水しやすく主水源なのだが、久留米藩(右岸)と柳河藩(左岸)の藩境でもあり、両藩の間で厳しい水の争奪戦が繰り広げられてきた。こうした事情から矢部川流域は江戸時代以後、水利技術と水利慣行が高度に発達する。堰から引き入れた水が領内を灌漑すると同時に収集されるように回水路を整備し、川から引き込んだ水と雨水をいったん堀にため、必要に応じて汲み上げと落水を繰り返すという循環的水利用の仕組みの完成である。一方で、雨などで水量が堀の保有能力を超えた場合には水は緩やかに田を浸すようになっており、水勢、水量を調節し洪水を防ぐ機能も併せもっている。

堀から田への用水は足踏みの水車が使われていたが、昭和30年代に水車に替わってポンプが普及し始めると、堀の要所に設置されたポンプで水を汲み上げ、地下に埋設したパイプを通じて各田に配水するようになった。水の出口に設置された装置は「灌水器(かんすいき)」と呼ばれ、堀とともに独特の田園風景を形づくっている。

堀は農業用水のほかにも生活雑用水、防火用水として利用される一方、馬の洗い場や子供の水遊



柳河城堀水門



灌水器

びの場でもあった。生活に欠かせない堀の存在は河童伝説をはじめ水にまつわる伝承を多く生み、市内には河童の手のミイラもいくつか伝えられている。また、現在でも水難事故と伝染病の防止、豊作の願いを込めて、地域の人の手でカワマツリが行われている。そのところどころで祭りの時期は異なるが、河童の総本山といわれる水天宮の祭りと時期を合わせる場合が多いようである。

こうして開拓、維持されてきた農地は、一大穀倉地帯筑後平野の一角をなす。その土壌が粘質土で水稲耕作に適しているため、農地の主体は水田で、主に小麦を裏作とする二毛作が行われている。野菜や果樹、花き類など、米以外の作物の生産量はごく少ない。

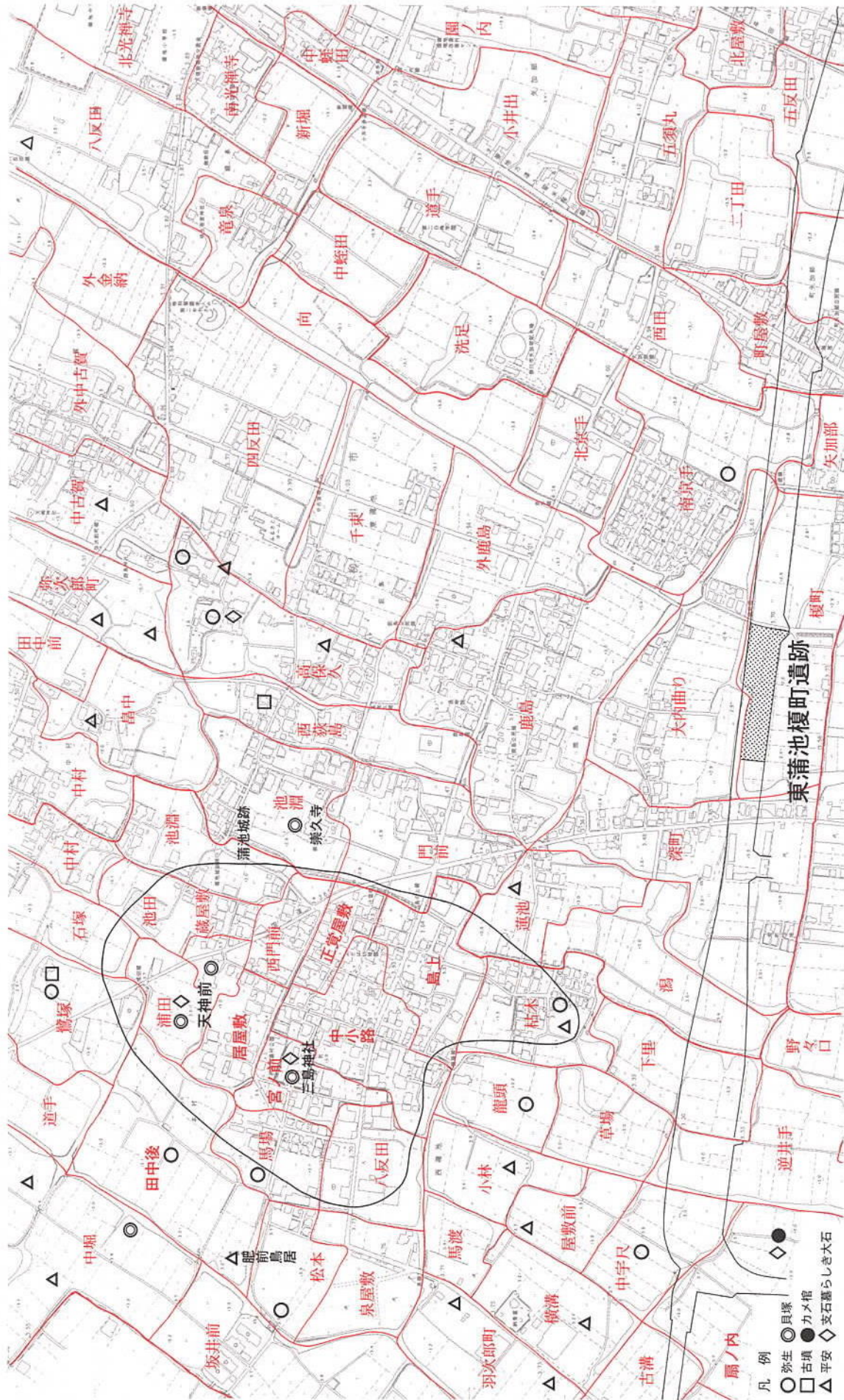
その少ない栽培作物の中で目立つのがイ草である。西鉄大牟田線で南下すると、久留米を過ぎた辺りから水田の中に深い緑色のイ草の田が混じり始め、そのうち一面深い緑色へとかわる。一昔前までは当たり前に見られた風景だ。福岡県は熊本県に次ぐ全国第2位の生産地で、主に南筑後地域で栽培されている。柳川市は大川市に続く主要産地だが、ゴザなどイ草製品の需用の減少、中国産畳表の流入を反映して、年々生産量は減少している。

筑後川河口付近の干潟は砂質、砂泥質で養分を多く含み、貝の生育に非常に適していて種類も豊富である。このため漁業は、のりの養殖が始まる昭和20年代以前は採貝が中心であった。「川下り」が有名になる前は「潮干狩り」が柳川観光の目玉であったことは、あまり知られていない。

貝類は生食用に販売されることが主であったが、明治14（1881）年に柳川特産品の缶詰を製造する会社が旧柳河藩士を中心に興されてのち、缶詰生産が行われるようになった。この会社は日清・日露戦争を通じて生産量が伸び、成功を収めた。旧武士が興した事業が成功した珍しい事例である。大正年間に缶詰生産は大量生産されるようになり、柳川を中心とする福岡・佐賀の組合が主に海外へ輸出するようになった。戦後再び缶詰ブームが起きるものの、貝類の捕獲量の減少に伴って工場も減り、今は市内では数軒が季節操業するにとどまっている。

缶詰製造業の隆盛に伴い、多量の貝殻が廃棄された。この貝殻を焼いてシロベ（白灰）として再利用するシロベヤキも、缶詰生産の隆盛とともに成長した。シロベは瓦の固定や家の壁塗りなどに主に用いられた。しかし、缶詰生産が下火になり、民家の建築様式の変化もあって、生産業者は急速に減少した。現在では市内の生産業者は沖の端地区に1軒のみになってしまったが、ここで生産されたシロベが旧戸島氏邸（県指定有形文化財年指定）の修復に使用されている。

採貝にかわり現在の有明海漁業の中心となっているのり養殖が福岡県で開始されたのは、明治33（1900）年、大牟田地先において県水産試験場が実施した試験養殖が嚆矢である。柳川市でのり養殖が始まるのは福岡県下でも遅い時期で、昭和26（1951）年に柳川地先で養殖試験が開始されて以降である。天然の種子場に近いたことがのり養殖の一つの条件であったため、人口採苗技術の進展をみてようやく、熊本から離れた柳川でも養殖が可能になったのである。昭和30年代末に全国的にのりブームがおき、この頃有明海沿岸地域でも貝類の捕獲量減少を理由に、のり養殖に転向する漁師が多かった。福岡県内では昭和40年頃から漁場が拡大し、空前の大ブームがおきる。以後、福岡県は佐賀県とともにのりの主産地となり、柳川市は大和町と並んでその主体となっている。



第2図 調査区周辺字図・遺物散布地位置図(1/7,500)

II 歴史的環境

これまで柳川市内では、その大部分が干拓地であるため本格的な発掘調査がほとんど行われてこなかった。昨年度（2003）柳川市教育委員会が実施した市道拡幅に先立つ調査が、教育委員会実施の発掘調査の最初である。継続事業のため報告書の刊行はいま少し俟たねばならないが、近世柳川の町の様子が明らかになることが期待される。よって本遺跡の発掘調査は市内で2件目であるが、報告書の刊行は最初のものとなる。

ここでは蒲池地区を中心に文化財の状況と歴史の変遷を概観しておきたい。

柳川市内における最初の発掘調査は、昭和27（1952）年7月に九州大学の鏡山猛氏によって実施された。大字西蒲池の井上清作氏宅で土取り作業を行った際に、多数の弥生土器とともに溝が確認されたのが発端である。弥生時代後期の溝が2条と井戸1基が調査され、その成果は「環溝住居跡小論」に報告されている。註3

翌28（1953）年には、甲木清（かつき きよし）氏が旧三潞郡域の分布調査の成果を『新考三潞郡誌』に報告し、集落遺跡のあり方について考察を加えている。註4旧三潞郡のうち現在柳川市に含まれるのは旧蒲池村（現 大字西蒲池・東蒲池）で、ここで多くの弥生土器が採集、発掘されていることが記されている。この蒲池地区は弥生土器を始めとする多くの遺物が採集される地域として知られており、水田耕作や土取り作業中に完形の弥生土器、土師器、須恵器が掘り出されることも珍しくなかったようで、はっきりと竪穴住居跡のプランが確認できたという話も聞く。掘り出された土器類は各個人で保管されている場合が多い。

ここで甲木氏の論考と「福岡県遺跡等分布地図」を基に、本遺跡周辺の遺物が採集された地点を第2図に示した。註5遺物の散布は西蒲池地区に集中して見られ、弥生土器と土師器の散布地が目立つ。

さて、三島神社がある字宮ノ前、字居屋敷、字天神前、字中小路、字正覚屋敷、字島上を中心とした地域は特に遺物の散布が顕著である。この地域では弥生時代の遺物が多く採集されており、貝塚も数箇所確認されている。未調査のため詳細は不明であるが、三島神社貝塚については土器のほか石庖丁や石斧、石錘、土錘などが見つかっており、発見された遺物は鏡山猛氏と甲木清氏によって保管されたそうである。

図中に数箇所、支石墓とおぼしき巨石が発見された地点を示している。大字西蒲池字扇ノ内では、昔から耕作の際に巨石を掘り当てることが良くあったといわれ、合せ口甕棺と玉類が見つまっている。三島神社楼門前の石橋に使用されている巨大な一枚岩もまた支石墓の上石と見られる。寛永14（1637）年、柳河藩家老十時三弥（ととき さんや）が西蒲池の田中後（たなかうしろ）にあったものを運ばせ寄進したといわれている。

さて、前項で述べたとおり、蒲池地区は柳市内ではかなり早い時期に陸地化していた



三島神社楼門前石橋

場所で、柳川市内の中世以前の遺跡、散布地はそのほとんどが蒲池地区に存在している。現在のところ、柳川市内で確認できる遺構、遺物で最も古いものは弥生時代中期のものである。

一方、本遺跡の北西、筑後川左岸に形成された自然堤防上に立地している大川市下林西田遺跡では弥生時代前期前半の遺構と遺物が確認されており、このころ人が住み着き、中期初頭～前半を最盛期として中期中頃まで営まれたとみられている。註6同様の立地の大川市酒見貝塚でも弥生時代前期の土器片が採集されている。註7弥生時代前期に筑後川や矢部川の自然堤防上などの微高地が既に人々の活動の場となっていたことは間違いない。おそらく本遺跡周辺は後背湿地にあたる低地で、弥生時代前期にはまだ人が踏み込めるような土地ではなく、中期になったころようやく土壌が安定し、居住が可能になったのであろう。

こうした状況から、三島神社を中心とした一帯に弥生時代中期以降の比較的大規模な集落の存在を十分推測できる。現状では貝塚、支石墓との関係は不明だが、集落の性格を明らかにするうえでも、有明海沿岸地域の弥生時代の様相を知るうえでも、注意が必要である。

この後古墳時代、奈良時代の様相については不明である。先述のように土師器、須恵器が採集されており、引き続き集落が営まれた可能性は高い。蒲池地区には湿田を表す「牟田」、空閑を表す「古賀」がつく地名がいくつか見出せる。これは筑後平野に多くみられる地名で、前項で述べたような土地の成り立ちに由来する。決して田地開発が容易な場所ではないことを示しており、用排水の整備を行いながら地道に開発が続けられたことだろう。

ここで目を転じ、史料上に現れる蒲池地区を追ってみる。最初に史料上に「蒲池」という名が登場するのは『和名類聚抄』の筑後国下妻郡「鹿待郷」の記述である。これは「蒲池郷」に相当する地名であろうと『大宰管内志』で述べられている。『大宰管内志』が書かれた頃、蒲池村は三潞郡に属しているが、下妻郡から三潞郡に編入されたのであろうとの見解が示されている。編入の時期は特定できないが、永仁4（1296）年「玉垂宮大善寺神事注文」註8により蒲池村が三潞郡西郷の構成村落であることがわかる。おそらく平安時代後期の土地支配つまり徴税機構の再編に伴う変化と見られている。また同年の「玉垂宮并大善寺仏神事次第写」註9には三潞荘関係の村落としての蒲池村の記載があり、三潞荘に属していたことが知られる。

この三潞荘の成立時期や成立事情はよく分かっていないが、平治元（1159）年「宝荘嚴院領荘園注文案」（東寺百合文書）註10によると、宝荘嚴院領中最大の荘園であったことがわかる。寛元4（1246）年「高良大社神宮所司等重申状」註11によれば、筑後国では竹野郡竹野新荘に次ぐ大荘園であったようだ。元徳2（1330）年に後醍醐帝により東寺に寄進されて以降東寺領となり、荘域はほぼ三潞郡全域、一部は山門郡の北部にまで及んだようである。

この三潞荘の中であって蒲池村がどの程度の規模、生産力をもっていたか、三潞荘成立当初から存在したかどうか、など具体的なことは不明である。永仁4年の記事によれば、神事の際に他の村落同様の負担を負っており、13世紀末には一定の生産力を有する村落として成立していたとみてよい。14世紀半ばには蒲池城が築かれ、その後蒲池氏の拠点となることを思えば、比較的大きな集落で生産力が高かったと考えられる。

さて、この蒲池城だが天慶年間に藤原純友一族が築き、その後蒲池氏の居城になったと『蒲池物語』には書かれているが、これは『前太平記』を根拠としてかかれており、史実として不確実である。しかし、応安5（1372）年「隈元政幸（くまもと まさゆき）軍忠状」註12、「大友親世（おおとも ちかよ）書状」註13、

永和2（1376）年5月7日「今川了俊書状写」注14に登場することから、少なくとも南北朝内乱期には存在していたことがわかる。蒲池鑑盛（あきもり）が柳河城を居城とするまで蒲池氏の居城だったが、のちに筑後国主田中吉政によって取り壊されたと伝えられる。蒲池城の正確な位置は確定できていないが、昭和60（1985）年に地元有志により西蒲池字池淵に「蒲池城跡之碑」が建立されている。

蒲池氏の出自や系譜については不明な点が多く、系譜を追うのは難しい。蒲池氏が史料上に登場する最も古い例は正和3（1314）年3月1日付鎮西御教書（岩清水八幡宮文書）註15に見える蒲池余一入道で、彼は香椎社領本吉荘（現 瀬高町）に所職をもっていたことがわかる。その後、南北朝末期に九州探題今川了俊に従った肥前の勝一揆の中にも蒲池氏が見られ（詫摩文書）、応永年間の鷹尾神社大宮司家文書の中に蒲池右馬助久家（うまのすけひさいえ）の名が見える。

『筑後誌略』によると、宇都宮貞久の孫、久憲が肥後から三潞郡蒲池村に移り、蒲池氏を名乗ったとされている。「蒲池系図」をたどると、久憲（久則）から五代目にあたる治久に鑑久（あきひさ）、親広（ちかひろ）の二子がある。親広の子、鑑広が上妻郡山下（現 立花町北山）に山下城を築いて上蒲池氏を名乗り、立花統虎（むねとら 宗茂）の弟、高橋統増の与力となっている。現在、各地に散在する「蒲池文書」は上蒲池氏のものである。一方で、鑑久の子、鑑盛（あきもり）は下蒲池氏を名乗り柳河城を居城としたが、鑑盛の子、鎮並（鎮漣 しげなみ）が竜造寺氏に謀殺され、下蒲池氏は滅びる。この事はフロイスの『日本史』にも記されている。

「蒲池城跡之碑」の南東に蒲池氏ゆかりの崇久寺がある。『筑後地鑑』、『南筑明覧』に、蒲池久憲が建立、南山土雲が開山で、勅願寺として塔頭が八箇寺あったが今はない、と記されている。本尊の十一面観音菩薩座像が14世紀頃の作と思われること、久憲が蒲池村に住したのが応永年間（1394～1427）頃であるといわれていることから、14世紀後半頃に創建されたと考えられる。境内には鑑盛の墓といわれる笠塔婆や、鎮並の娘、徳女の墓である板碑が残る。

天正15（1587）年立花宗茂が立花城から柳河城に移り、三潞、下妻、山門の三郡を支配した。しかし関ヶ原合戦時に西軍に与した宗茂は改易となり、田中吉政が筑後一国を与えられて慶長6（1601）年に入国。以後約20年間その支配が続くが、吉政の跡を継いだ忠政は世継ぎに恵まれないまま病死し、田中家は断絶。再び立花宗茂が柳川、三潞郡、山門郡、三池郡を領することとなり、以後廃藩置県までその支配が続く。柳河藩と同時期に久留米藩（有馬氏）が成立するが、この時蒲池地区はちょうど藩境になり、両藩に分断されてしまった村もあった。

江戸時代になっても蒲池一帯はかわらず農村地帯であり続けた。城下以外は蒲池組（14か村）と宮永組とに分けられ、郷方郡役の支配下におかれた。蒲池組側の干拓地はおよそ50数筆で、全般に小規模なものが多かった。上級武士が関係した開地のほか百姓請、町人請の開地も多い。

蒲池村は明治初年に東蒲池、西蒲池、西蒲池北分、南金納（みなみかんのう）、北金納に分村するが、明治22年に東蒲池、西蒲池、蒲生（かもう）、立石、高島、金納、矢加部（やかべ）の各村が合併して再び蒲池村となり、柳川市が誕生する昭和29（1954）年まで存続する。

註

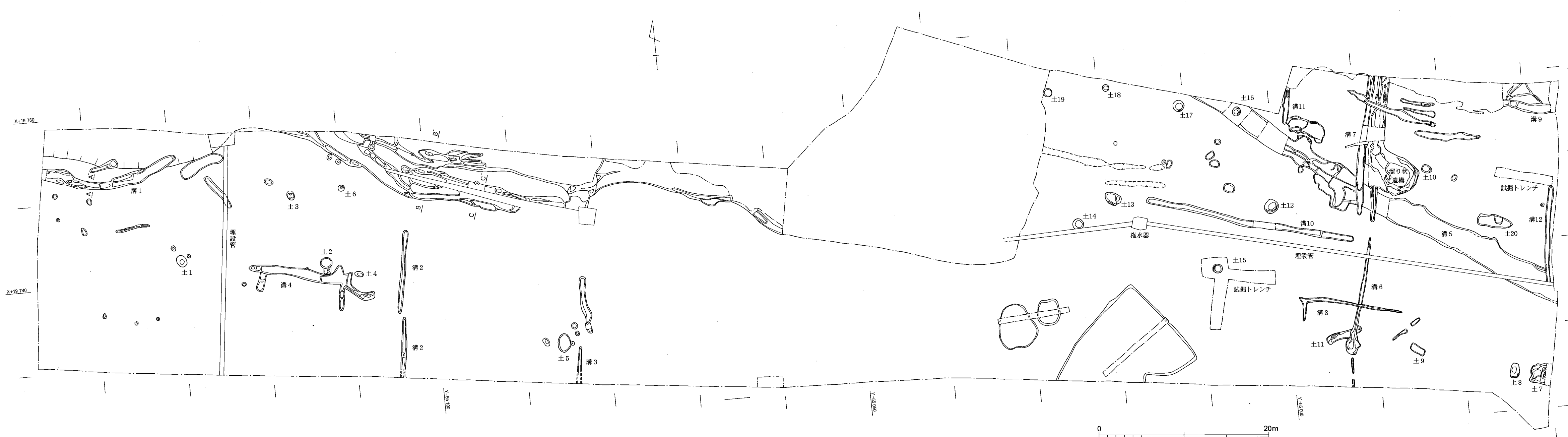
- 1 下山正一 「有明海沿岸低平地の成因と海岸線の変遷」『ミュージアム九州』第52号 博物館等建設推進九州会議 1996 掲載図14を一部改変。
- 2 『柳川地名調査報告書』柳川歴史資料集成第5集 柳川市 2002
- 3 鏡山猛 「環溝住居址小論」1956
『九州考古学論攷』吉川弘文館 1972 に「環溝住居址論攷」として再録。
- 4 甲木清 「筑後川下流左岸地域特に三潯郡に於ける集落とその開発」『新考三潯郡誌』1953
- 5 字境、字名は註2文献による。
- 6 『下林西田遺跡』福岡県文化財調査報告書第132集 福岡県教育委員会 1998
- 7 『酒見貝塚』大川市文化財調査報告書第1集 大川市教育委員会 1992
『酒見貝塚』大川市文化財調査報告書第2集 大川市教育委員会 1994
- 8 永仁4年12月日「玉垂宮大善寺神事注文」〔隈文書／鎌倉遺文19238〕
- 9 「御船文書」久留米市文化財収蔵館寄託
- 10 註4文献による。
- 11 「田中穰氏旧蔵典籍古文書」国立歴史民俗博物館蔵
- 12 『新柳川明証図会』柳川市史別編 柳川市 2002
- 13 註12文献による。
- 14 永和2年5月7日「今川了俊書状写」〔阿蘇家文書／大日本古文書〕
- 15 註12文献による。

参考文献

- 『新柳川明証図会』柳川市史別編 柳川市 2002
- 『福岡県遺跡等分布地図』（大牟田市・柳川市・山門郡・三池郡編）福岡県教育委員会 1978
- 『福岡県遺跡等分布地図』（大川市・筑後市・三潯郡編）福岡県教育委員会 1979
- 『角川日本地名大辞典』40 角川書店 1988
- 『新考三潯郡誌』1953
- 『ミュージアム九州』第52号 博物館等建設推進九州会議 1996
- 『柳川地名調査報告書』柳川歴史資料集成第5集 柳川市 2002
- 『柳川資料集成月報』7 柳川歴史資料集成第5集付録 柳川市 2002



並倉



第3図 遺構配置図(1/300)

第3章 調査の記録

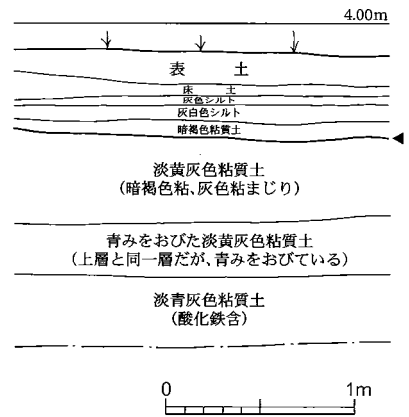
I 遺跡の概要

本遺跡は柳川市大字東蒲池に位置し、水田と堀に隣接している。目立った地形の変化は見られない。調査面積は5,700㎡である。

調査地西半から調査に着手し、反転作業の後、東半の調査を行った。近隣の住民の方によると、本遺跡とその周辺の水田では水の引き入れのために繰り返し地下げが行われているとの話だが、その割には遺構の残存状況が良い。調査地東端付近が最も遺構密度が高く、西半は密度が低い。

遺構検出面の標高は3m前後で、淡黄灰褐色粘質土の地山に、暗褐色粘質土や灰褐色粘質土の埋土をもつ遺構が切り込んでいる。淡黄灰褐色粘質土の層は中央から下半は地下水の影響で青みを帯びている。その下層は淡青灰色粘質土で、同じ調査区内の別の地点では黄灰色粘質土であることから、これも地下水の影響による変色である。淡黄灰褐色粘質土、黄灰色粘質土の層は、前章で触れた非海成粘土層に相当する。

検出した遺構は土坑20基、溝12条、溜り状遺構、ピット、堀跡である。建物跡は検出されおらず、各時代集落の縁辺部、もしくは水田部分にあたるものと思われる。出土した遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、陶磁器、石剣、石庖丁、石鍋、その他石製品である。



第4図 基本土層図 (1/40)

II 遺構と遺物

土坑

1号土坑 (図版2、第5図)

調査区西端に位置するほぼ円形の土坑。長軸1.4m、短軸1.1m、深さ0.37mを測る。埋土は灰色粘質土である。

出土遺物 (第6図)

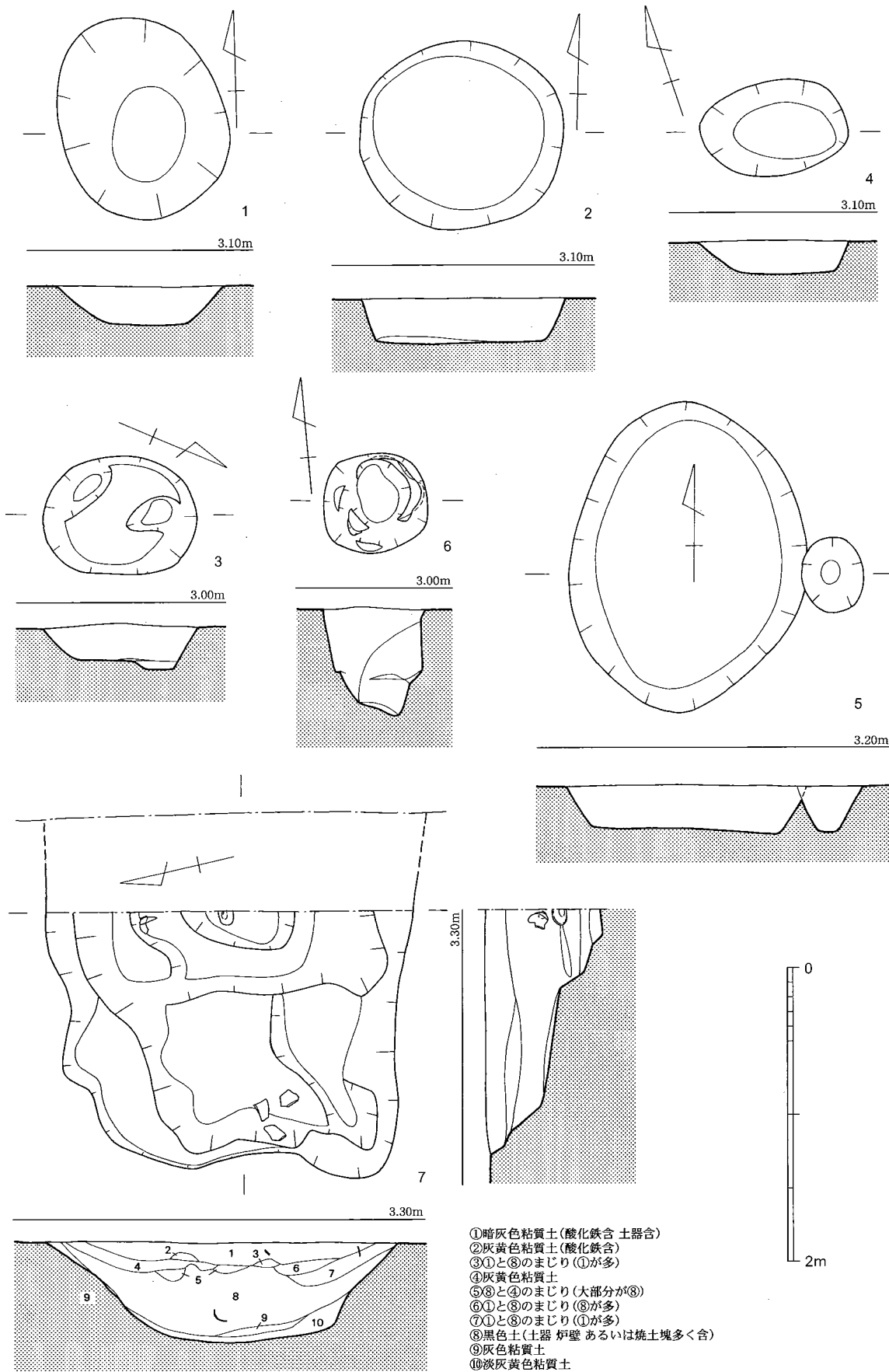
1は土師器高杯の坏身片である。外面にカキ目が残る以外は磨滅して調整不明。

2号土坑 (図版2、第5図)

調査区西半に位置する円形の土坑。径1.4m、深さ0.35mを測る。埋土は灰色粘質土である。遺物は出土していない。

3号土坑 (図版3、第5図)

調査区西半北寄りに位置する楕円形の土坑。長軸1.05m、短軸0.8m、深さ0.25mを測る。埋土は灰色粘質土である。遺物は出土していない。



第5図 1～7土坑実測図(1/40)

4号土坑（図版3、第5図）

調査区西半に位置する楕円形の土坑。長軸1.0m、短軸0.65m、深さ0.23mを測る。埋土は暗褐色粘質土である。出土遺物は図示した瓦器碗のみである。

出土遺物（第6図）

2は瓦器碗である。口縁部内面をわずかにくぼませる。体部内面は密にミガキを施す。口縁部から体部外面上半はヨコナデ調整後、下半はユビナデ調整後に雑なミガキを施す。指頭痕が多く残る。復元口径16.5cm。

5号土坑（図版3、第5図）

調査区西半南寄りに位置する楕円形の土坑。長軸2.1m、短軸1.55m、深さ0.33mを測る。埋土は灰色粘質土。

出土遺物（第6図）

3は須恵器蓋片である。かえりが短く、天井部が低い。天井部外面は回転ヘラ削り、体部外面から内面はヨコナデ調整。復元口径18.0cm。

4は坏身片である。口縁端部を欠失する。内外面ともヨコナデ調整。

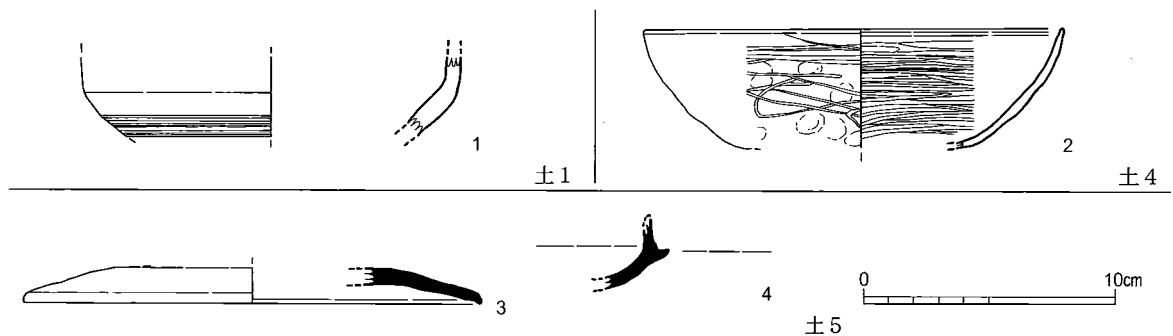
6号土坑（図版4、第5図）

調査区西半北寄りに位置する円形の土坑。径0.7m、深さは最深部で0.73mを測る。埋土は上層から暗褐色粘質土（多）と地山ブロックの混じり、灰色粘質土、地山ブロック（多）と暗褐色粘質土の混じりで、最下層に黒色土の堆積が見られた。遺物は出土していない。

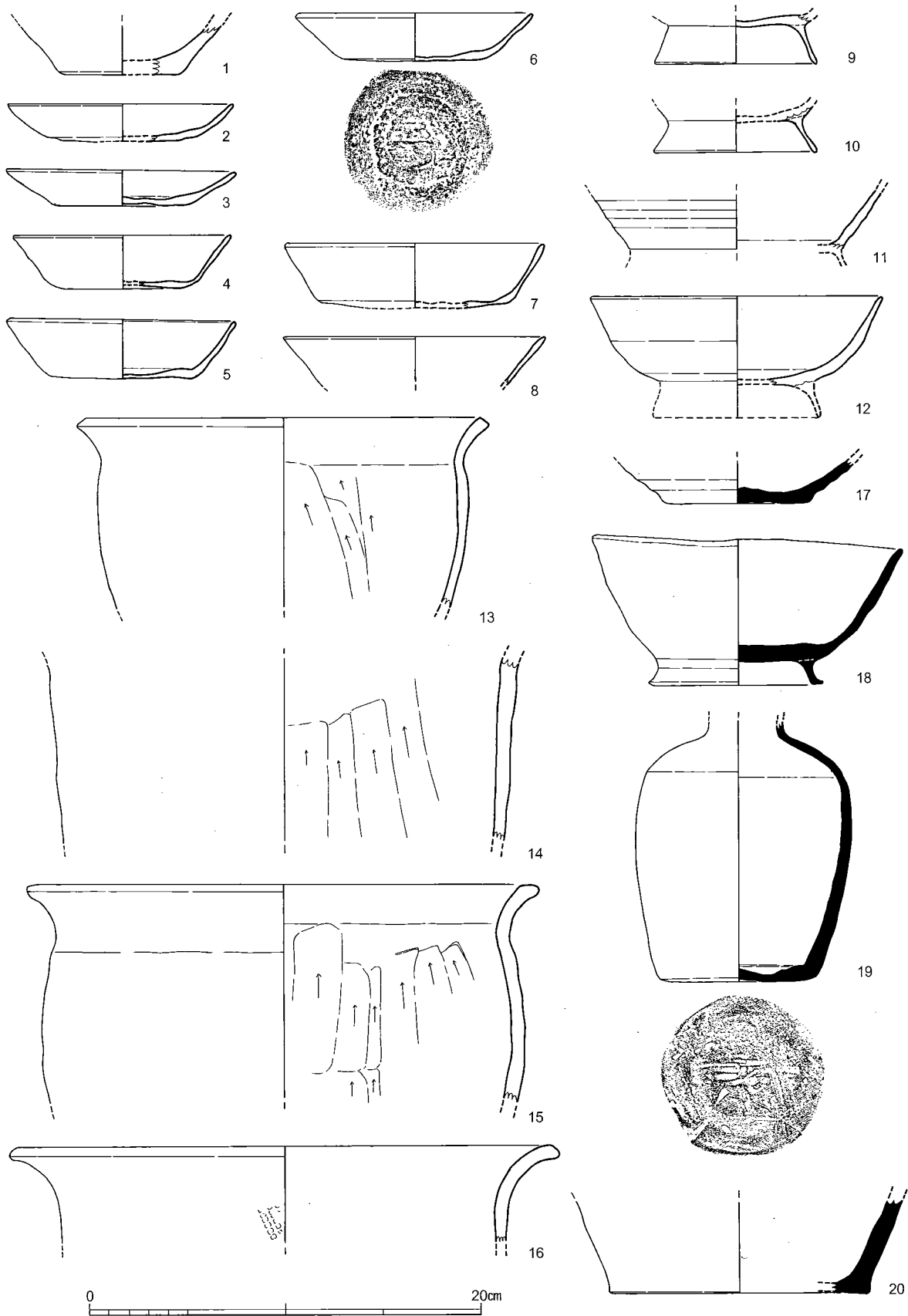
7号土坑（図版4、第5図）

調査区東半南寄り、8号土坑の東に位置する不整形の土坑。調査区外まで広がり全形は不明。長軸2.5m、短軸1.82m、深さは最深部で6.7mを測る。埋土の大部分はしまりのない黒色土で、炉壁と思われる焼土塊を含んでいる。土坑の壁や底には被熱の痕跡がない。土坑内で火を焚いたか、別の場所で燃やした後に灰等を捨てたと思われる。埋土の状況から、後者の可能性が高い。

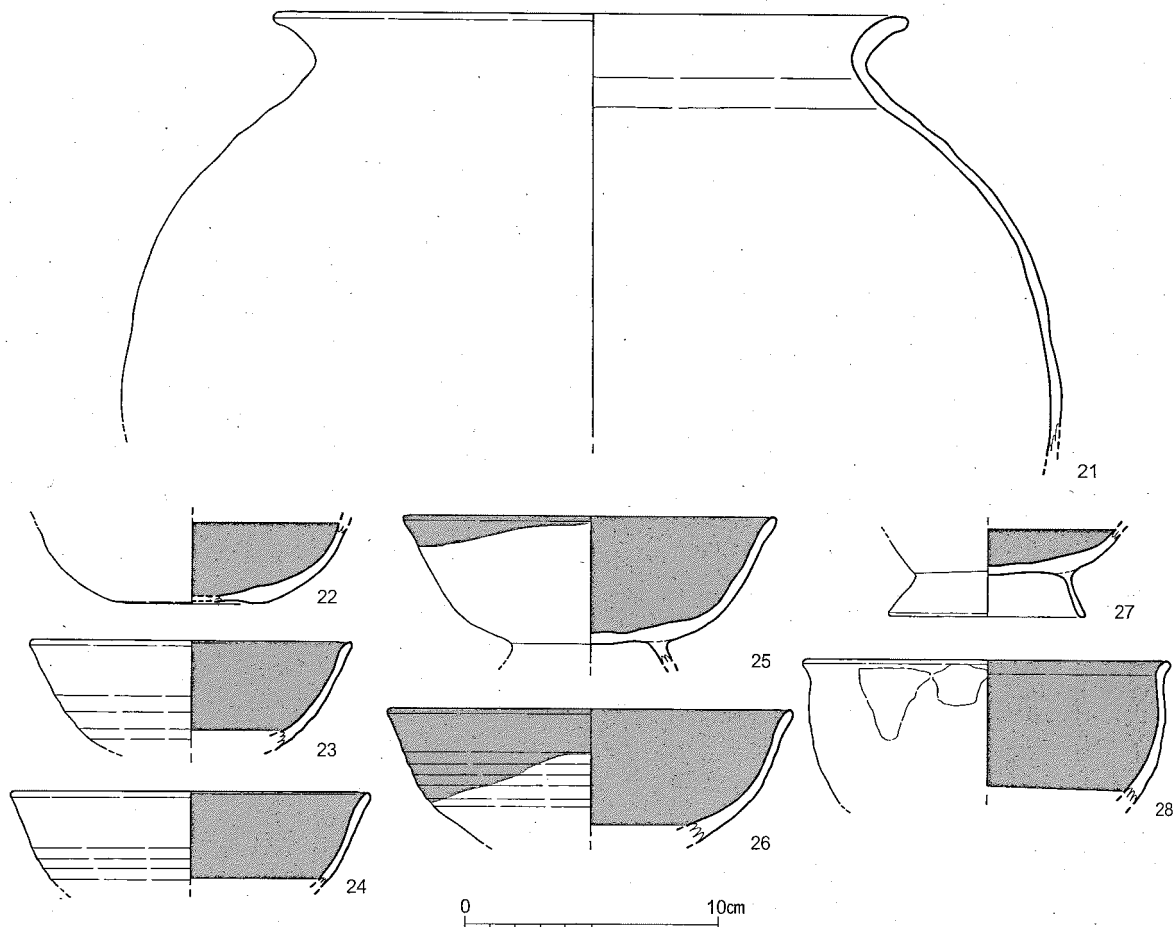
本遺跡で検出した土坑の中で最も多くの遺物が出土し、図示した土器のほか近世陶磁片、砥石（第25図）が出土している。



第6図 1・4・5土坑出土土器実測図(1/3)



第7图 7号土坑出土土器实测图①(1/3)



第8図 7号土坑出土土器実測図②(1/3)

出土遺物 (図版9、第7・8図)

1は弥生土器壺底部片で、混入品である。内外面とも磨滅著しく調整不明。復元底径6.0cm。

2～16・21は土師器。2・3は小皿。2は磨滅著しく調整不明。底部はヘラ切り離し。復元口径12.0cm、器高2.0cm、復元底径8.0cm。3は体部が直線的に外方へのびる。磨滅して内外面とも調整不明。底部はヘラ切り離し。復元口径12.2cm、器高1.9cm、復元底径7.2cm。

4～8は坏。4は体部内外面、底部内面をヨコナデ調整、底部外面はヘラ切り離し後ナデ調整。復元口径11.0cm、器高2.75cm、復元底径6.2cm。5は完形である。体部は内外面ともヨコナデ調整、底部内面はナデ調整、底部外面はヘラ切り離し後未調整。体部内面と底部外面の一部が被熱のため赤変。口径12.2cm、器高3.3cm、底径7.6cm。6も完形。内面は磨滅して調整不明。体部外面はヨコナデ調整。底部はヘラ切り離し後未調整で、板状圧痕が残る。口径12.7cm、器高2.6cm、底径7.6cm。7は磨滅のため調整不明。底部はヘラ切り離し後未調整。復元口径13.0cm、器高3.5cm、復元底径9.4cm。8は底部を欠失。磨滅著しく調整不明。復元口径13.2cm。

9～12は椀である。9は底部片。高台外面はヨコナデ調整だが、他部分は磨滅して調整不明。復元高台径8.15cm。10は高台部分の破片。磨滅により調整不明。復元高台径8.2cm。11は体部片で、底部から直線的に外方にのびる。磨滅著しく調整不明。12は体部が丸みをもって立ち上がる。9・10のような高台が付くであろう。体部外面はヨコナデ調整、底部外面はナデ調整。内面は磨滅して

調整不明。復元口径14.8cm。

13は小型の甕。口縁端部は角張って仕上げる。外面はタタキ成形後、口縁部はヨコナデ調整、体部はヘラナデ調整で仕上げる。調整は丁寧に行われており、タタキの痕跡は面として確認できるだけで、図化できない。口縁部内面はヨコナデ調整、体部内面はヘラ削り。復元口径20.1cm。14は口縁部を欠失。体部は直線的で寸胴、甕であろう。外面はタタキ後ヨコナデ調整。口縁部内面はヨコナデ調整、体部内面はヘラ削り。復元口径24.0cm。15は口縁部がゆるく外反する。外面は磨滅している。口縁部内面はヨコナデ調整、体部内面はヘラ削り。復元口径26.0cm。16の口縁部は体部から屈曲せずに外反する。甕であろう。口縁部は内外面ヨコナデ調整。体部外面は細かい正格子のタタキ成形後ヨコナデ調整。体部内面はヨコナデ後ヘラ削りか、磨滅して不明瞭。復元口径27.2cm。21は甕片。口縁端部は丸みをもって仕上げ、大きく外反する。図化した破片は器壁の剥離が著しく、調整不明。同一個体と思われる破片も磨滅が著しく不明瞭だが、体部は内外面とも粗いハケメ調整である。

17は須恵器坏身片。体部外面と内面はヨコナデ調整、底部外面はヘラ切り離し後未調整。復元底径7.2cm。18は歪んでいるがほぼ完形の須恵器高台坏。底部と体部の境付近に、外方に踏ん張るように張り出す高台をもつ。体部外面は上半をヨコナデ調整、下半を回転ヘラ削りする。体部内面はヨコナデ調整、底部は内外面ともナデ調整。口径17.7cm、器高7.2～8.1cm、高台径9.35cm。

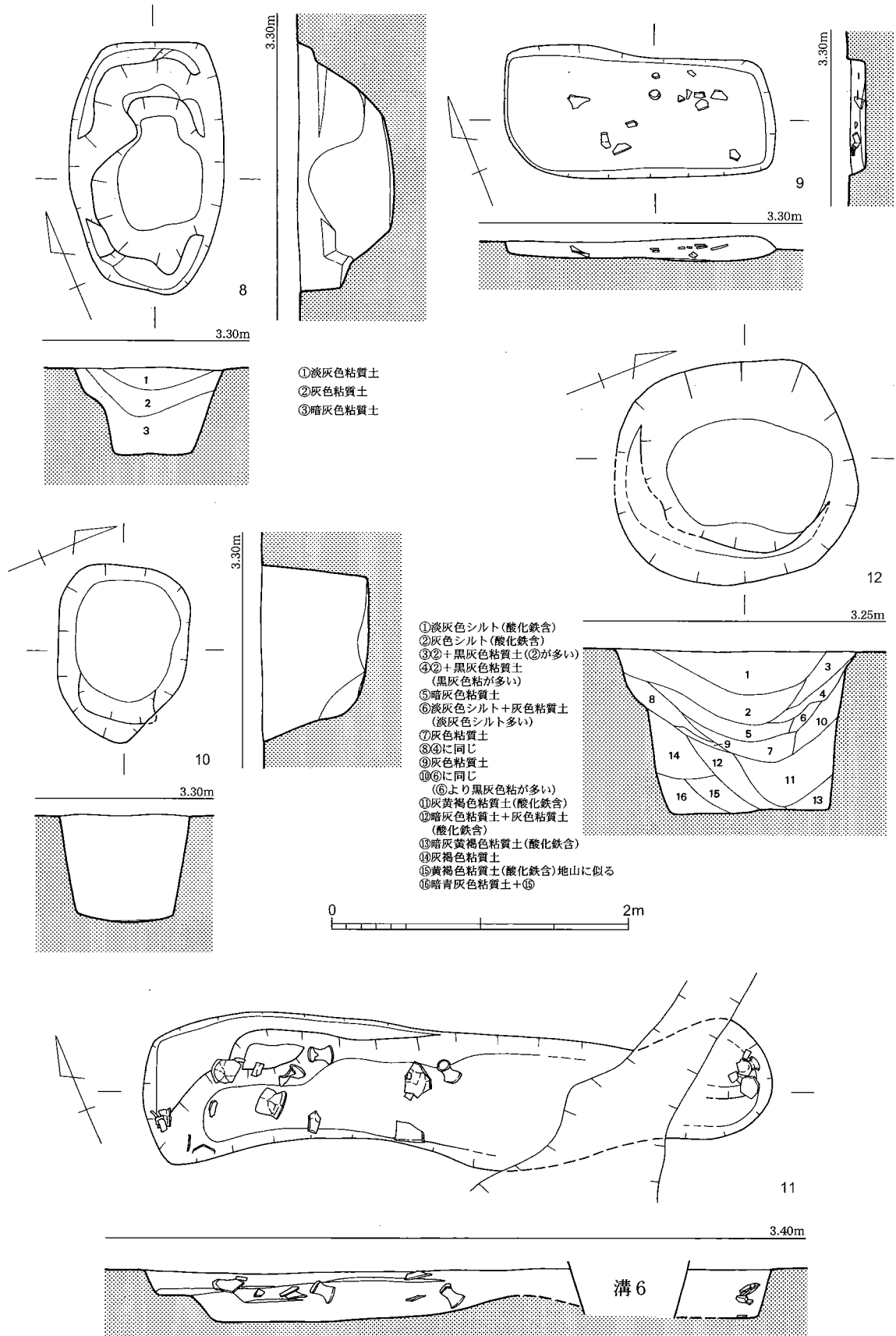
19は口縁部を欠失する壺。外反する口縁部がつくと思われる。肩はなだらかで張らない。内外面ともヨコナデ調整。底部外面はナデ調整後、中央をヘラ状の工具で削ったような痕がある。最大体部径11.5cm、底径7.3cm。25は壺底部片。器壁の厚みが一定でなく、全体に雑な作りである。体部外面は回転ヘラ削り、内面はヨコナデ調整。底部外面は雑なナデ調整。復元底径12.8cm。

22～29は黒色土器。22は無高台の坏。体部は丸みをもって立ち上がる。体部外面はヨコナデ調整、下半を回転ヘラ削りしたようだが不明瞭。底部外面はヘラ切り離し後ナデ調整。内面は磨滅して調整不明。復元底径6.2cm。23は底部を欠失しているが、口径が小さく坏であろう。内外面とも磨滅して調整不明。復元口径12.8cm。24もまた底部を欠失する。若干口径が小さいが、ここでは坏と考えておく。内外面ともヨコナデ調整。復元口径14.0cm。

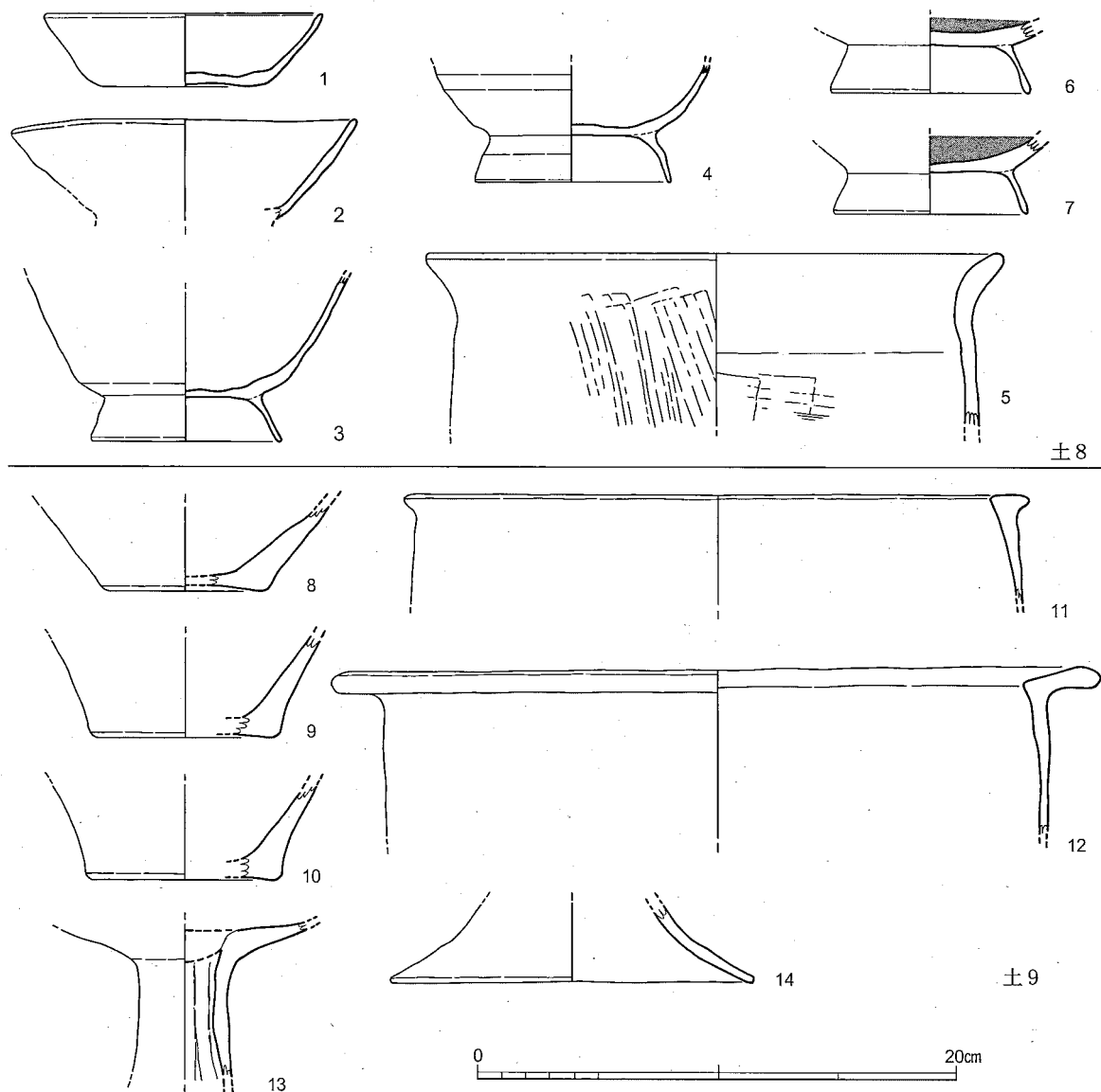
25は高台の下半を欠失するが、27のような高い高台がつくであろう。体部は内外面ともヨコナデ調整、体部下半を回転ヘラ削り調整する。底部は内外面ともナデ調整。復元口径15.4cm。26は器形が25とよく似る。磨滅して不明瞭だが、体部内外面ともヨコナデ調整。復元口径15.8cm。27はやや歪むが薄く高い高台をもつ底部片である。復元高台径7.6cm。28は口縁部が短く外反するが、椀であろう。内外面ともヨコナデ調整。外面の口縁部下に炭化物が付着している。復元口径12.3cm。

8号土坑（図版5、第9図）

調査区東半南寄り、7号土坑の西に位置する、やや歪んだ長方形の土坑。長軸1.68m、短軸1.05m、深さ0.65mを測る。埋土は灰色粘質土を中心とする。土器のほかに砥石（第26図）が出土している。



第9図 8～12号土坑実測図(1/40)



第10図 8・9号土坑出土土器実測図(1/3)

出土遺物 (図版9、第10図)

1～5は土師器。1は全体に磨滅気味であるが、体部は内外面ともヨコナデ調整、底部内面はナデ調整、底部外面はヘラ切り離した後未調整。口径12.1cm、器高3.2cm、底径6.9cm。2は体部片。直線的に体部がのび、高台がつくと思われる。磨滅著しく調整不明。復元口径14.4cm。3・4は椀。3の底部内面は磨滅のため調整不明、底部外面はヘラ切り離した後ナデ調整。他はヨコナデ調整。復元高台径7.8cm。4は体部が丸みをもって立ち上がり、薄く高い高台をもつ。全体に磨滅して調整不明。高台径8.0cm。5は甑であろう。口縁端部がわずかに外反する。口縁部は内外面とも磨滅のため調整不明。体部外面は粗いハケメ調整。内面は磨滅して不明瞭だが、粗いハケメ調整のようである。復元口径24.0cm。

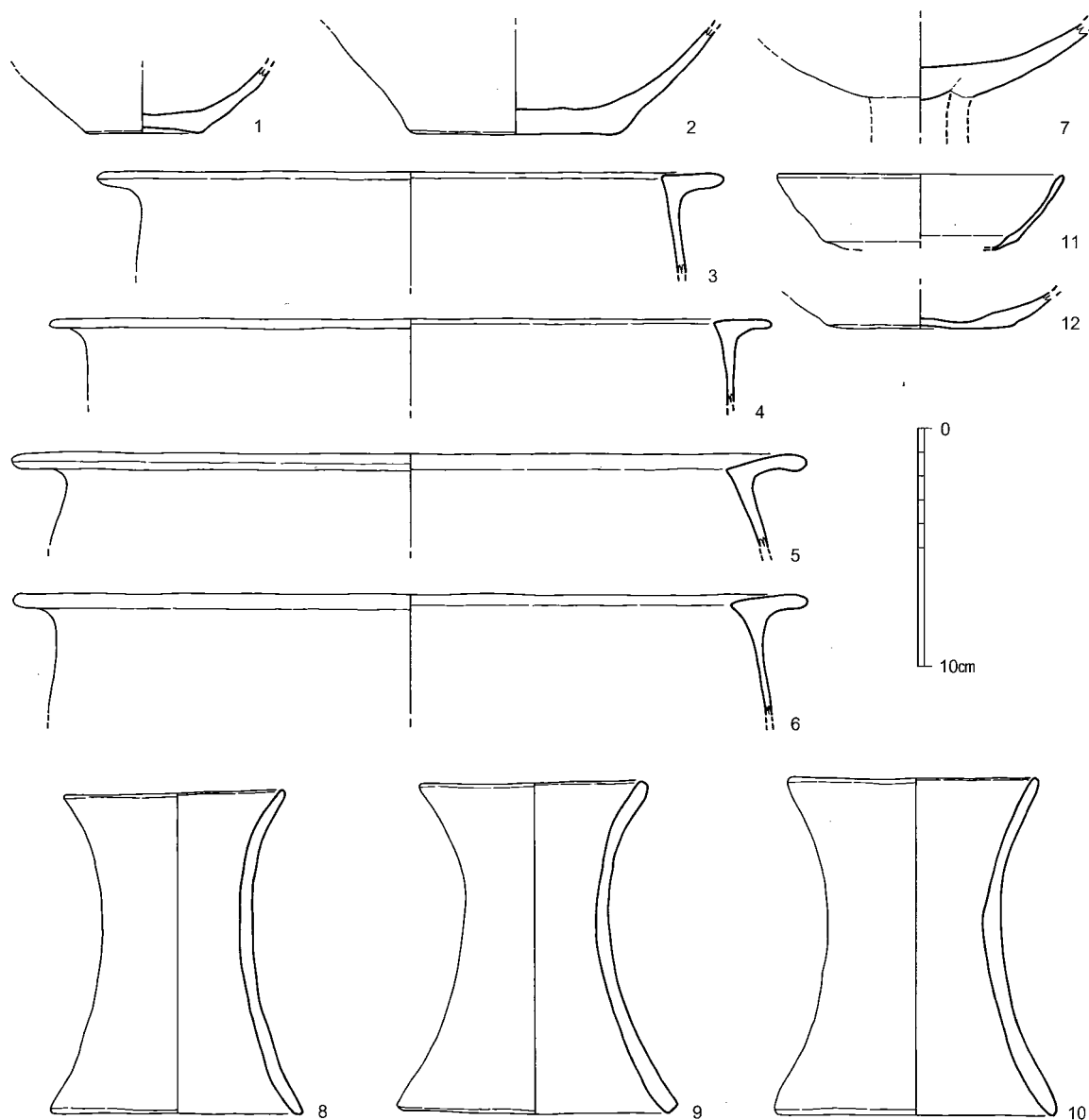
6・7は黒色土器椀。器形は4の土師器椀によく似る。ともに内外面とも磨滅のため調整不明。6の復元高台径8.2cm、7の高台径8.1cm。

9号土坑 (図版5、第9図)

調査区東半南寄りに位置する長方形の土坑。長辺1.65 m、短辺0.85 m、深さ0.15 mで、非常に残りが悪い。埋土は炭化物混じりの淡灰色粘質土である。

出土遺物 (第10図)

弥生土器が出土している。7は壺底部片。底部はわずかに上げ底。磨滅著しく調整不明。復元底径6.7 cm。8・9は甕底部片。どちらも磨滅のため調整不明。復元底径は8が7.4 cm、9が7.6 cm。10は甕口縁部片。口縁部はわずかに内傾し、端部は短く突出する。磨滅著しく調整不明。復元口径26.0 cm。11は逆「L」字状口縁。磨滅著しく調整不明。復元口径32.0 cm。12・13は高坏片。12は脚部と坏体部を一体につくった後、坏底部に充填した粘土が剥離している。磨滅著しく、脚部内面にしぼり痕が残る以外は調整不明。13は脚端部片で、同様に調整不明。復元底径14.9 cm。



第11図 11号土坑出土土器実測図(1/3)

10号土坑（図版5、第9図）

調査区東半に位置する不整楕円形の土坑。長軸1.2m、短軸0.85m、深さ0.73mを測る。埋土は黒褐色粘質土、灰褐色粘質土、地山ブロックの混じりである。遺物は出土していない。

11号土坑（図版6、第9図）

調査区東半に位置する溝状の土坑。6号溝より古い。長さ4.25m、幅0.9m、深さ0.3mを測る。9号土坑の状況から、この土坑もある程度削平されていると思われる。埋土は淡灰色粘質土と黄灰色粘質土で、地山との識別が難しい。9号土坑と埋土の状況が似ており、同時期であろう。土師器坏が出土しているが、後世の混入品である。

出土遺物（図版9、第11図）

1から10は弥生土器。1・2は壺底部片。どちらも磨滅著しく調整不明。復元底径は1が4.7cm、2が8.2cm。3～6はいずれも逆「L」字状口縁の甕口縁部片。磨滅著しく調整不明。復元口径は順に30.0cm、33.0cm、37.0cm。7は高坏の坏部片。脚部と坏体部の接合面から剥離している。器壁の剥離と磨滅が著しく調整不明。8～10は器台で、いずれも磨滅著しく調整不明。8～10は器台。8は口縁の一部を欠く。復元口径9.7cm、器高14.2cm、底径11.0cm。9は完形。口径9.9cm、器高14.65cm、底径12.2cm。10は復元口径11.0cm、器高14.8cm、復元底径12.4cm。

11・12は土師器坏。いずれも磨滅著しく調整不明。底部はヘラ切り離しである。11の復元口径11.8cm、12の復元底径7.9cm。

12号土坑（図版6、第9図）

調査区東半に位置するほぼ円形の土坑。長軸1.6m、短軸1.5m、深さ1.1mを測る。埋土は黒褐色粘質土を中心とする。近世陶磁片ほか少量の土器が出土しているが、小片のため図示できない。

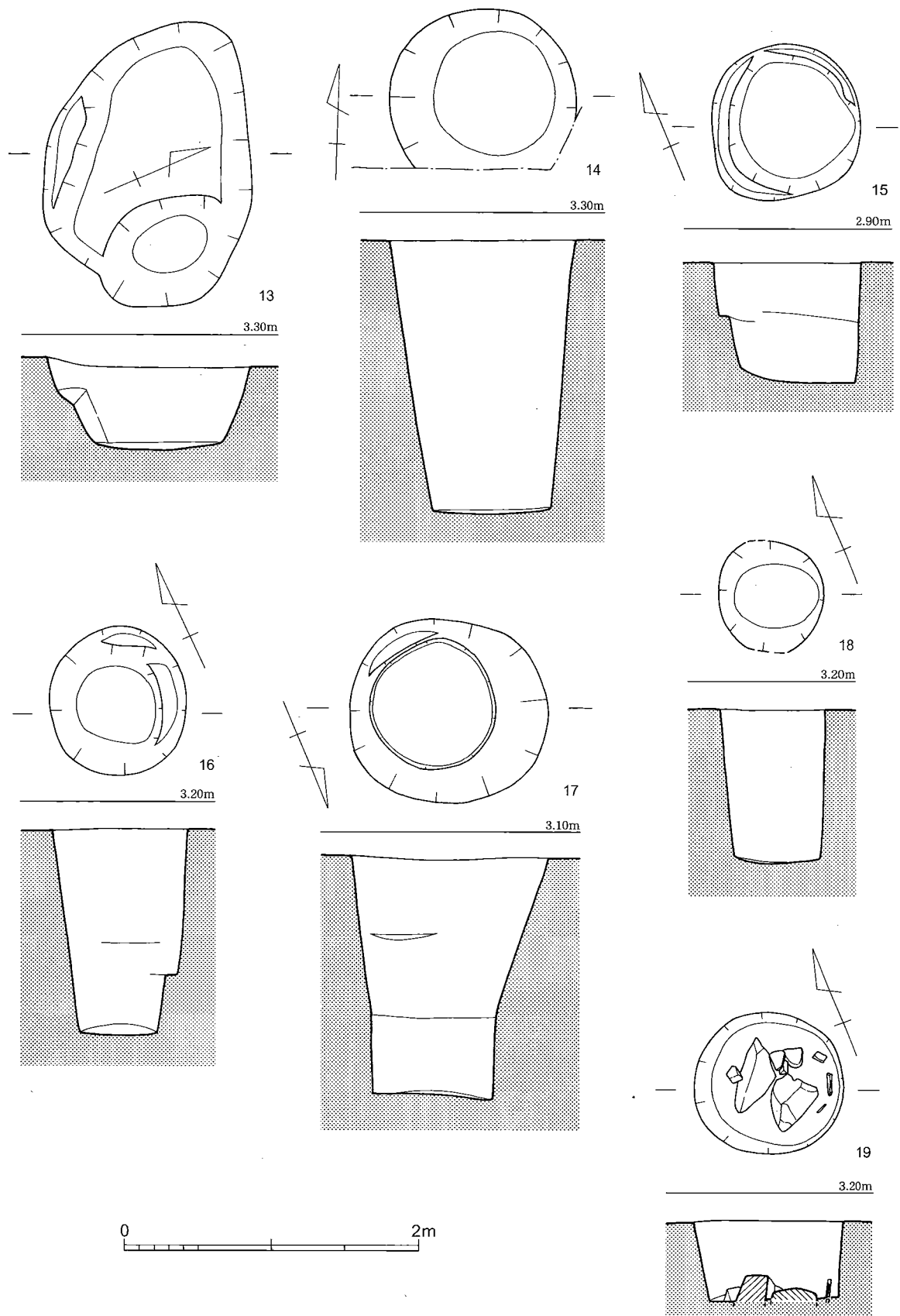
13号土坑（図版6、第12図）

調査区東半に位置する不整形の土坑。長軸1.93m、短軸1.43m、深さ0.57mを測る。埋土は上層から、灰色シルト、灰色粘質土、灰色粘質土と暗灰色粘質土の混じり、灰褐色シルトと灰色粘質土の混じりである。最下層の一部に炭化物を含む黒色粘質土が堆積している。図示した遺物のほかに近世陶磁片が出土している。

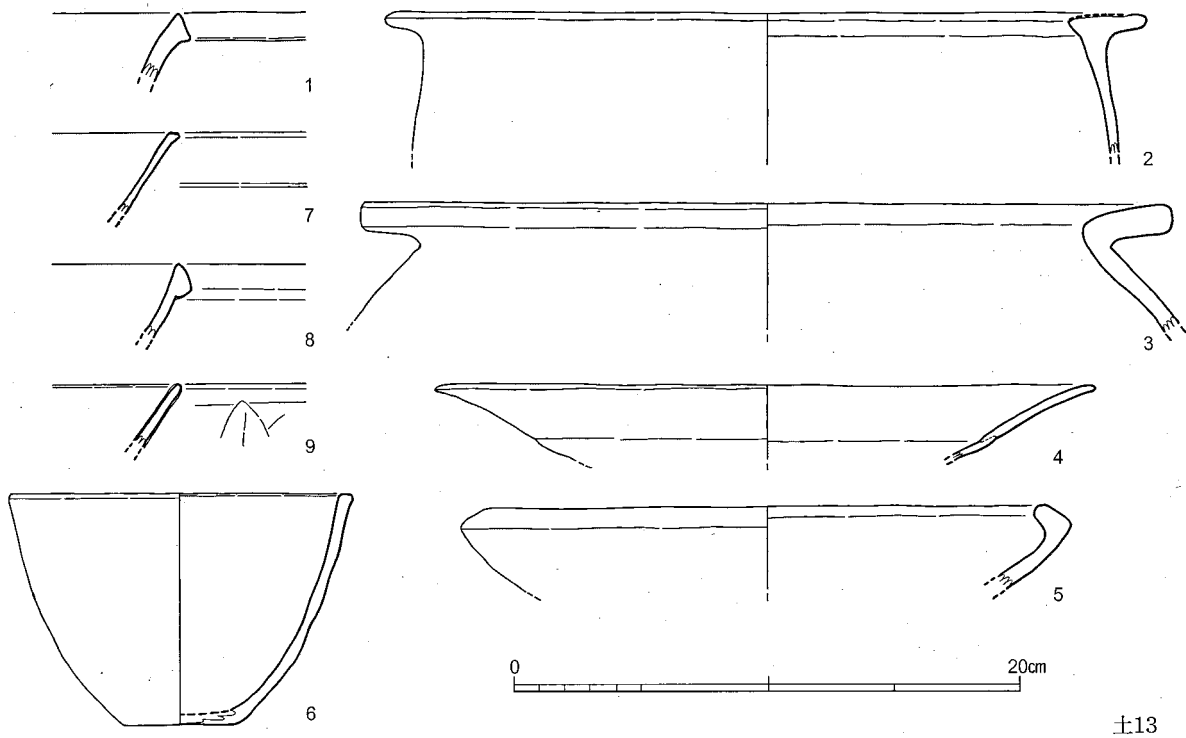
出土遺物（第13図）

1～6は弥生土器。1は壺口縁部小片。磨滅のため調整不明。2は鋤先状口縁の甕口縁部片。磨滅と器壁剥離のため調整は不明。復元口径30.0cm。3は口縁端部を角張って仕上げる。磨滅のため調整不明。一部、被熱のため赤変。復元口径32.0cm。4・5は高坏の坏部片。4は口縁部が外方に大きく開く。磨滅により調整不明。復元口径26.0cm。5は口縁端部が内側に屈する、豊前系の高坏である。磨滅により調整不明。復元口径21.0cm。6は鉢。磨滅と器壁の剥離により調整不明。体部下半から底部に黒斑あり。復元口径13.4cm、器高9.2cm、復元底径4.4cm。

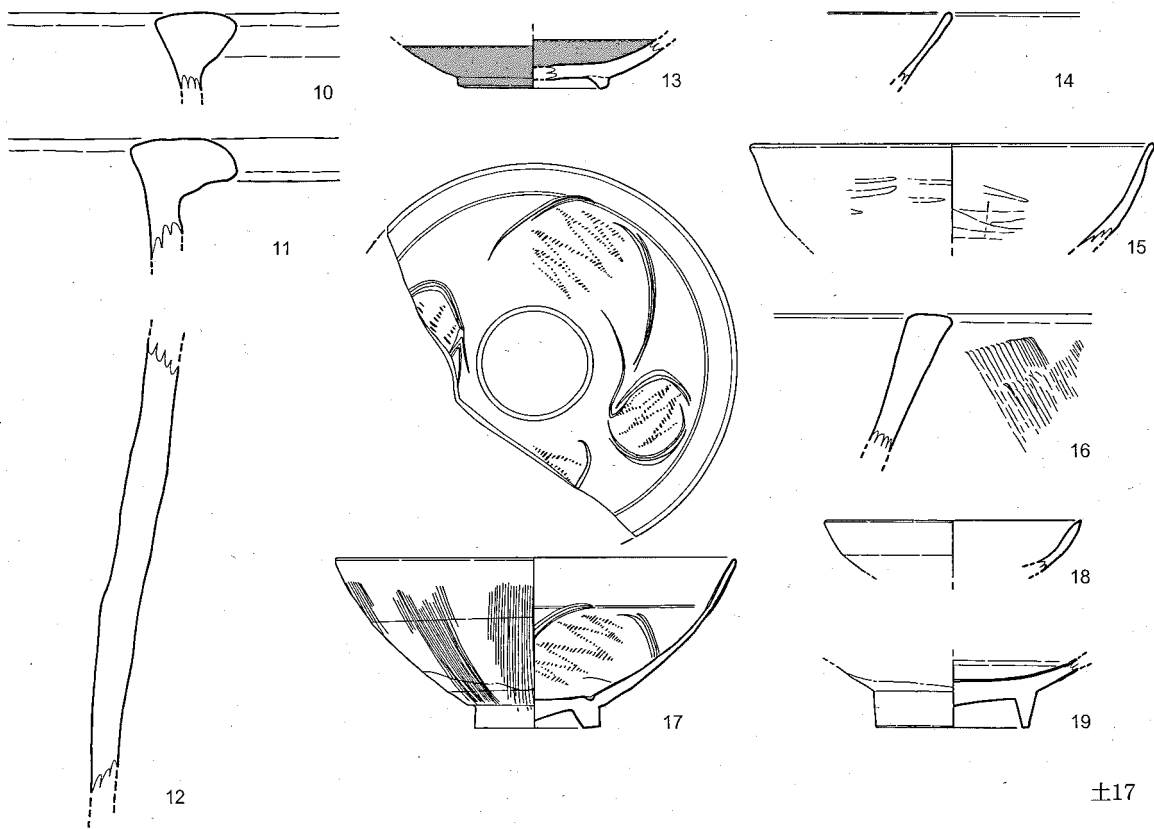
7～9は輸入磁器。7・8は白磁碗の口縁部小片。7は口縁端部を平らにつくる。体部外面にごく浅い沈線が巡る。胎土は淡灰色、釉は黄味を帯びた灰色。8は玉縁をもつ。胎土は淡灰色で黒色粒を含む。釉は黄味を帯びた灰色でごく薄くかかる。9は龍泉窯系青磁碗の口縁部小片。体部外面に蓮弁を削りだす。蓮弁には低い鑄がある。胎土は灰褐色。釉は暗灰緑色で厚めにかかる。



第 12 图 13 ~ 19 号土坑实测图 (1/40)



土13



土17

第 13 图 13·17 号土坑出土土器实测图 (1/3)

14号土坑（図版7、第12図）

調査区東半、13号土坑の西に位置する円形の土坑。径1.26 m、深さ1.86 mを測る。埋土は暗灰色粘質土である。底面付近は埋土、地山とも水分量が多くて非常に柔らかく、掘削は困難であった。地山の暗青灰色粘質土と埋土の区別がつかなくなったところで掘削を中止したが、やや正確さに欠ける。形状と埋土の状況から井戸であろう。出土遺物はない。

15号土坑（図版8、第12図）

調査区東半に位置する円形の土坑。径1.05 mを測る。試掘トレンチで上部を削られており、トレンチ底面からの深さは0.82 mである。深さを復元すると1.22 mになる。埋土は灰色粘質土。14号土坑と同様の状況で、地山と埋土の区別がつかなくなったところで掘削を中止した。形状と埋土の状況から井戸であろう。磨製石剣片（第24図）が出土している。

16号土坑（図版8、第12図）

調査区東半北寄りに位置するほぼ円形の土坑。5号溝より新しい。長軸1.0 m、短軸0.9 m、深さ1.32 mを測る。埋土は灰色粘質土である。形状と埋土の状況から井戸であろう。遺物は出土していない。

17号土坑（図版9、第12図）

調査区東半北寄り、16号土坑の西に位置するほぼ円形の土坑。長軸1.35 m、短軸1.25 m、深さ1.65 mを測る。埋土は暗灰褐色粘質土、灰色粘質土、地山ブロック、黒色土の互層である。形状から井戸であろう。底面から0.5 mの高さまで壁が直立するのは、井戸枠の痕跡であろうか。

出土遺物（図版10、第13図）

10～12は弥生土器甕片。10は断面三角形の口縁部をもつ。磨滅著しく調整不明。11は逆「L」字状の短い口縁をもつ。外面はヨコナデ調整、内面は磨滅により調整不明。12は体部片で、内外面ともナデ調整。混入品である。

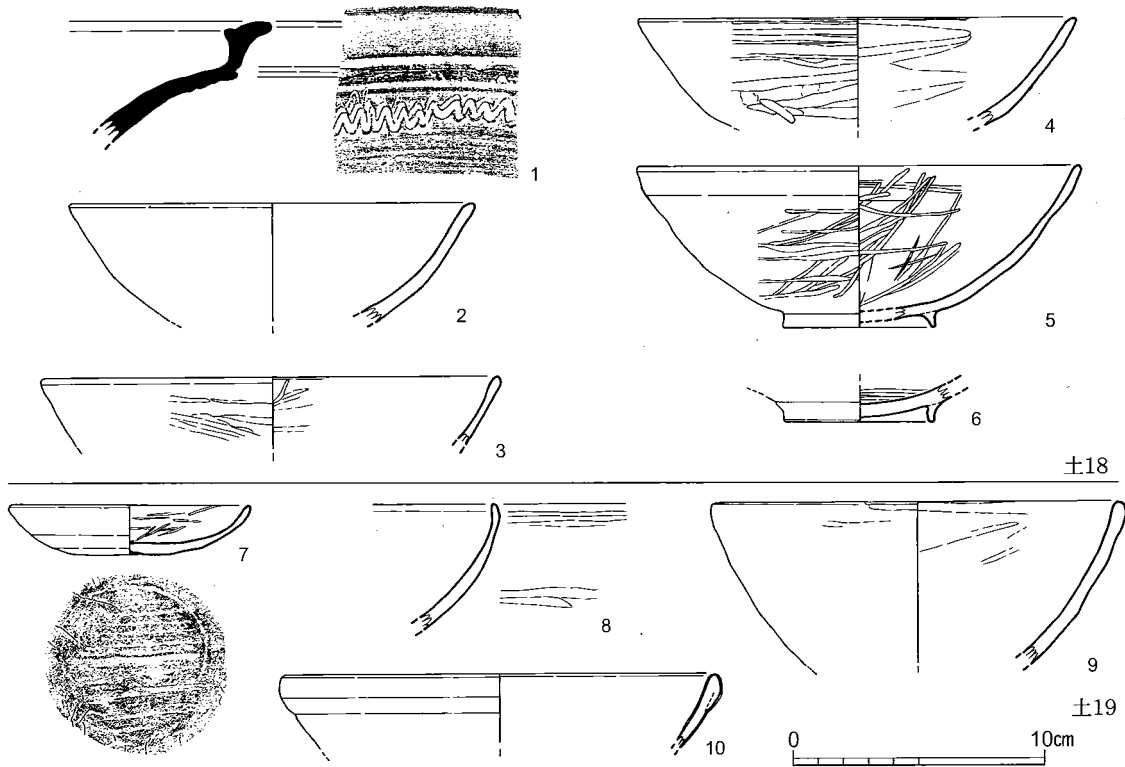
13は黒色土器碗の底部片。低い高台をもつ。内外面とも磨滅著しく調整不明。復元高台径5.8 cm。

14・15は瓦器碗片。14は口縁端部が磨滅しているが、体部外面はヨコナデ調整。体部内面はミガキを施すが、ミガキの単位は不明。一部、被熱のため赤変。破面が変色しており、破片になってからの被熱である。15は口縁部が磨滅しているほかは、内外面ともミガキ調整。内面に不明瞭だが工具痕が残る。復元口径15.7 cm。

16は鉢である。体部外面はヨコナデ後ハケメ調整。口縁端部から内面は磨滅して調整不明。

17は同安窯青磁碗。外面は口縁部下から回転ヘラ削りし、厚く高台を削り出す。内面はヘラと櫛で施文し、底部と体部の境、口縁下に沈線を巡らす。胎土は灰色で粗い。釉は黄緑灰色で、薄くかかる。体部下半から底部は露胎。口径16.5 cm、器高7.1 cm、高台径5.2 cm。

18・19は白磁。18は皿口縁部片。体部中位で軽く屈曲し、口縁部は薄く引き出す。胎土は灰白色で黒色粒を含む。釉はわずかに青みを帯びた灰白色。復元口径10.1 cm。19は碗底部片。薄く高い高台を削り出す。内面は、底部と体部の境に浅い沈線を巡らす。胎土は灰白色で粗い。釉は黄味がかかった灰白色で、体部と高台の境付近まで薄くかかる。復元高台径6.0 cm。



第14図 18・19号土坑出土土器実測図(1/3)

18号土坑 (図版8、第12図)

調査区東半北寄り、17号土坑の西に位置する円形の土坑。径0.7 m、深さ1.05 mを測る。埋土は灰色粘質土、地山ブロック、黒色土の互層。土器のほか滑石製品、砥石(第25図)が出土している。

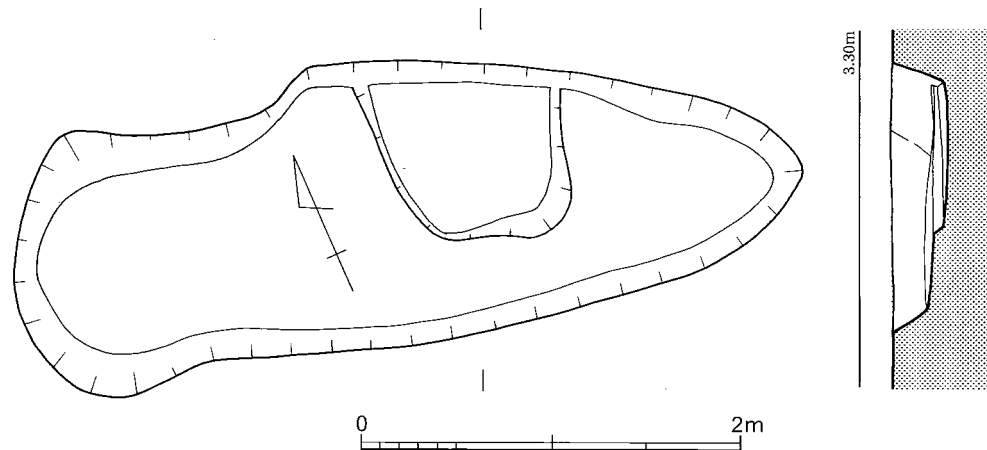
出土遺物 (第14図)

1は須恵器甕口縁部片。口縁端部を内側に突出させ、外方へつまみ出す。内外面ともヨコナデ調整で、外面口縁部下にヘラで波状文を施文する。内面は灰を被り、外面の一部に自然釉が見られる。

2～6は瓦器碗片。2は器面の荒れが著しく、ミガキを施したことは判るが、単位は不明。体部外面下半は指頭痕を消すようにミガキを行ったようである。復元口径15.7 cm。3は内外面ともヨコナデ後ミガキ調整。器壁が剥離、淡褐色に変色している箇所があり、被熱している可能性がある。復元口径17.7 cm。4の体部外面はヨコナデ後雑なミガキ調整。体部下半は指頭痕を均すようにミガキ調整する。体部内面はミガキ調整。復元口径17.2 cm。5の口縁部はヨコナデ調整、体部外面はミガキ調整で、下半に指頭痕が多数残る。内面はヨコナデ後ミガキ調整で、工具痕が残る。復元口径17.6 cm、器高6.4 cm、復元高台径6.0 cm。6は底部片。底部外面は回転ヘラ削り後、高台を貼付する。内面は円周方向にミガキ調整。復元高台径5.9 cm。

19号土坑 (図版8、第12図)

調査区東半北寄り、18号土坑の西に位置し、堀と接する円形の土坑。径1.0 mを測る。埋土は灰色粘質土と黄灰色粘質土が混じる。埋土が大変硬く締まり掘削が困難であり、人頭よりも大きな石が投げ込まれていたため、深さ0.55 mまでで掘削を断念した。14・15・17号土坑とは埋土の状況が全く違うが、井戸ではなかったかと考えている。



第15図 20号土坑実測図(1/40)

出土遺物 (図版9、第14図)

7～9は瓦器である。7は完形の小皿。口縁部外面はヨコナデ調整、内面はミガキ調整するが、不明瞭。体部外面下半は回転ヘラ削り調整。底部はヘラ切り離しで、板状圧痕が残る。内外面とも黒色に燻しており、光沢がある。口径9.3～10.0 cm、器高2.0 cm。

8は椀の体部片で、口縁部がわずかに内湾する。内外面ともミガキ調整。内面のミガキの単位は不明。外面は下方ほどミガキが雑になる。9も椀であろう。口縁端部を丸く仕上げ、器壁が厚い。口縁部は内外面ともミガキ調整だが、ほかは磨滅著しく調整不明。復元口径15.8 cm。

10は近世白磁椀の口縁部片。胎土は白茶色で粗く、釉は黄味がかかった白色で厚めにかかる。10号溝、13号土坑出土の破片と接合。復元口径16.9 cm。

20号土坑 (第15図)

調査区東半に位置する不整形の土坑。長軸4.2 m、短軸1.5 m、深さ0.3 mを測る。埋土は灰色粘質土。遺物は土師器が出土しているが、小片のため図化できない。

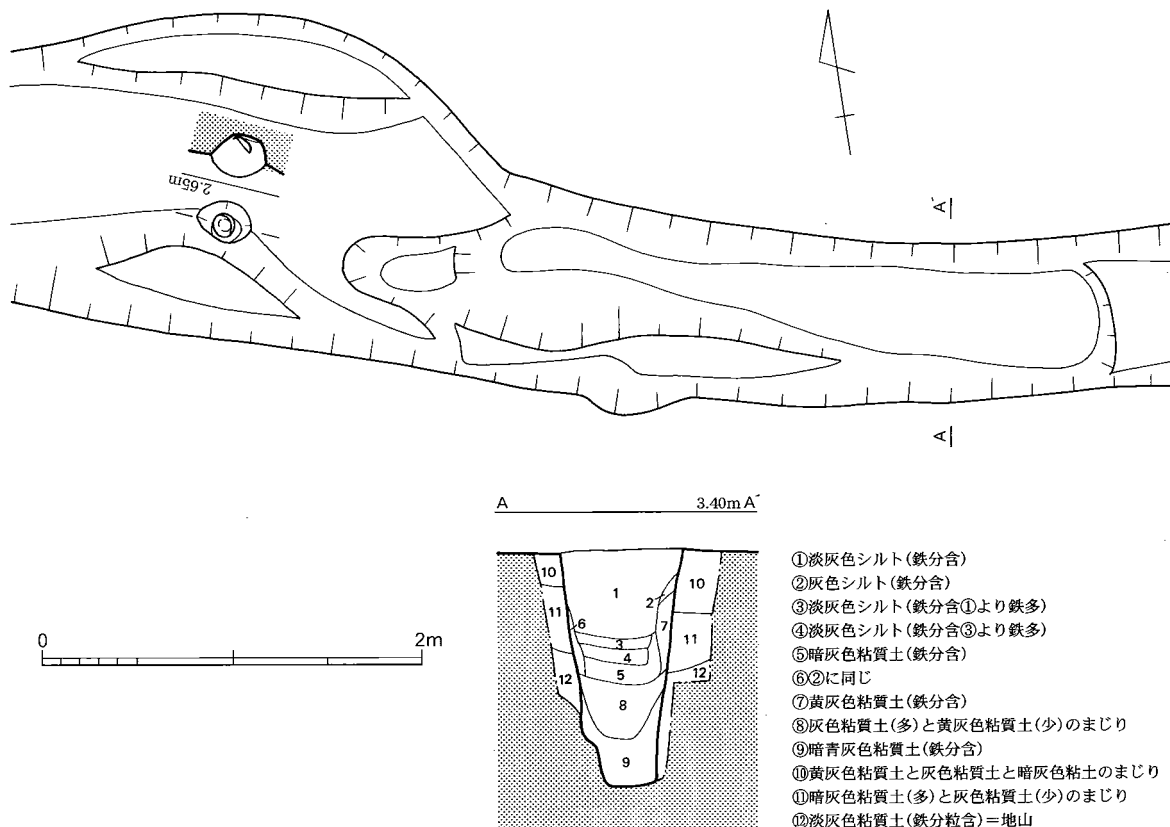
溝

1号溝 (第3・16図)

調査区西端に位置する東西溝。西端は調査区外までのび、東端は堀に削られ浅くなっている。長さ16.0 m、幅0.85～1.7 m、深さ0.3 mを測る。完形の土師器坏が溝底のピットから出土しており、溝の時期はこの坏の時期と考えられる。ちょうど土層断面図を作成した部分は極端に深く、溝の他の部分と状況が異なる。堀の落ち際にのびる溝の形状や埋土の状況と、土層断面部分の状況とが似ているため、この部分のみ後世に掘り直されたと考えられる。図示した土器以外に、青磁片、近世陶磁片が出土している。

出土遺物 (図版10、第17図)

1～3は土師器。1はほぼ完形の坏身である。全体に磨滅して調整は不明だが、底部外面に手持ちヘラ削りしたらしい痕跡が残る。胎土は精良で、ほとんど砂粒を含まない。口径12.6 cm、器高4.7 cm、底径5.9 cm。2は甑の把手片。全体に磨滅している。



第 16 図 1号溝土器出土状況・断面土層図(1/40)

3は鉢か。口縁部に粘土帯を貼付し、玉縁状に成形する。

4は須恵器坏身小片。体部は内外面ともヨコナデ調整、底部内面はナデ調整、底部外面は回転ヘラ削り。ヘラ記号あり。

2号溝(第3図)

調査区西半に位置する南北溝。長さ9.9m、幅0.5m、深さ0.1mを測る溝と、東に0.5mずれて調査区外にのびる同規模の2本の溝である。調査区外の田地の畦畔と方向、位置が一致することから畦畔に伴う溝である。位置がずれるが同一畦畔に伴う溝と解釈し、同一番号を付した。埋土は暗褐色粘質土である。

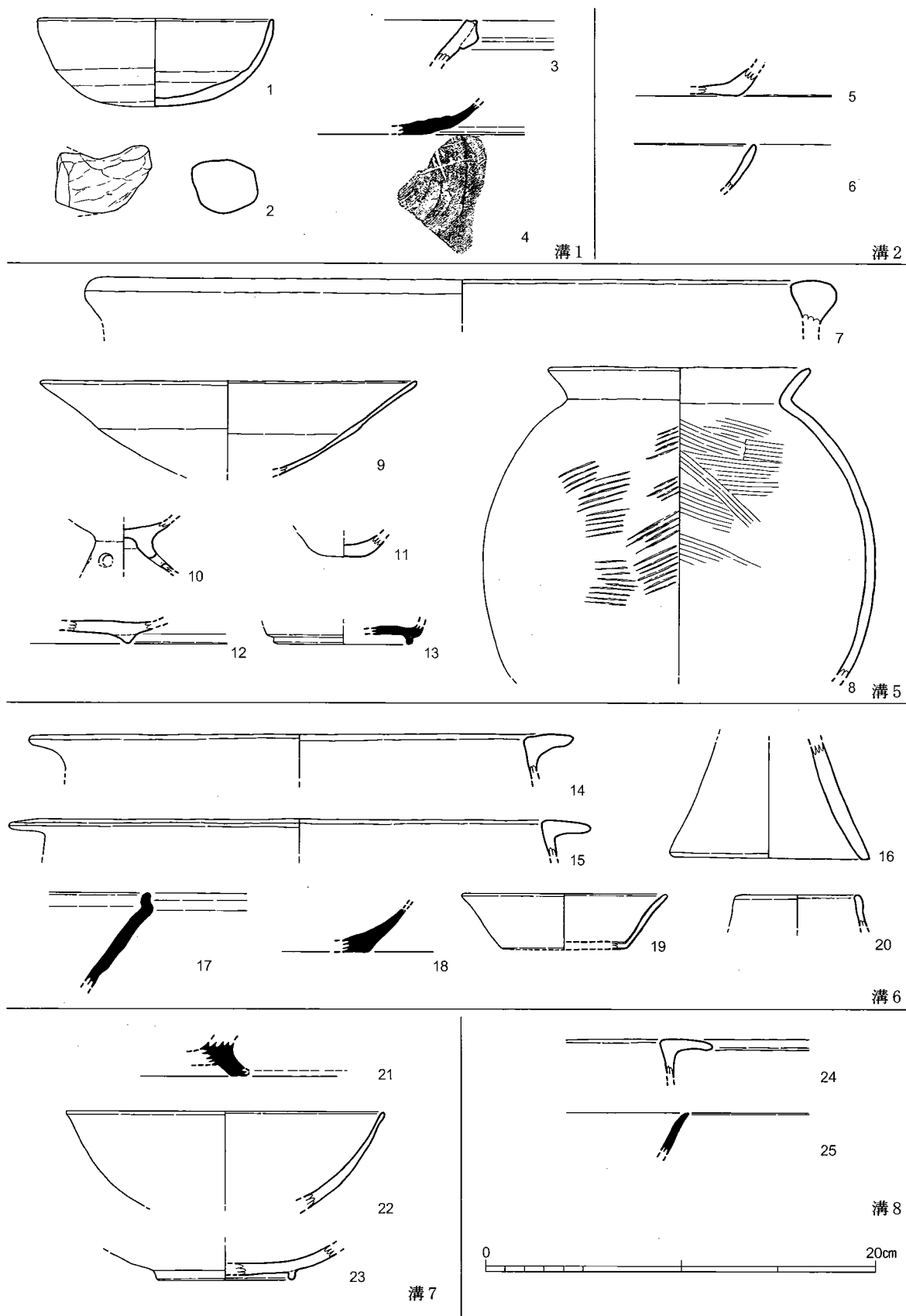
出土遺物(第17図)

5は土師器坏身の小片。全体に磨滅著しく調整不明。

6は瓦器碗の口縁部小片。口縁端部はヨコナデ調整するが、ほかは器面の荒れ、磨滅のため調整不明である。

3号溝(第3図)

調査区西半に位置する南北溝。南端は調査区外にのびる。長さ4.0m、幅0.5m、深さ0.05mを測る。埋土は暗褐色粘質土。2号溝と同様の状況を示し、やはり畦畔に伴う溝である。出土遺物はない。



第17图 1·2·5~8号沟出土土器实测图(1/3)

4号溝 (第3図)

調査区西半に位置する東西溝。不規則な形状をして折り、深さも一定でない。長さ15.2 m、幅0.6～1.3 m、深さは最深部で0.2 mを測る。土師器片が少量出土したが、小片のため図化できない。

5号溝 (第3図)

調査区東半に位置する北西-南東方向の溝。6・7号溝、16号土坑、溜り状遺構より古い。長さ49.5 m、幅1.8～5.0 m、深さ0.45 mを測る。6・7号溝、溜り状遺構と交差する部分は検出が難しく、溝の幅が一定せずやや浅くなる。埋土は灰褐色粘質土で、一様に埋まっている。砂の堆積は一切見られない。短期間に埋没したか、埋められたのであろう。規模のわりに出土遺物量は少ない。

出土遺物 (図版10、第17図)

7は弥生土器の甕口縁部片。断面三角形の口縁で、磨滅著しく調整不明。復元口径40.0 cm。

8は小型の甕。口縁部は屈曲部から直線的に外反する。口縁部は内外面ともヨコナデ調整。体部外面は直線タタキ、体部内面はハケメ調整。全体に磨滅気味で調整は不明瞭。体部下半が被熱のため赤変。復元口径14.0 cm、復元最大体部径20.0 cm。

9は土師器高坏の坏部片。磨滅および器面の剥離のため調整不明。磨滅を考慮しても器壁が非常に薄い。復元口径20.0 cm。10は小型器台の脚部片。全面に磨滅しており、調整不明。3ヵ所に穿孔。

11はミニチュア土器の底部。全面磨滅して調整不明。底径2.6 cm。

12は土師器高台坏の底部片。断面三角形の低い高台をもつ。全体に磨滅著しく調整不明。

13は須恵器高台坏の底部片。低い高台をもち、体部は底部から直に立ち上がると思われる。内外面ともヨコナデ調整。復元高台径7.5 cm。

6号溝 (第3図)

調査区東半に位置する南北溝。8号溝、溜り状遺構より古く、11号土坑、5号溝より新しい。途中途切れたり水溜り状になっている部分があるが、一連の溝ととらえている。総延長24.0 m、幅0.5 m、深さは溝部分が0.1 m、水溜り状になっている部分の最深部で0.2 mを測る。埋土は暗褐色粘質土である。現在の畦畔とは位置がずれるが、一定の幅と方向性を持っており、2・3号溝と埋土等の状況が似るため、ある時期の畦畔に伴う溝ではないかと考える。

出土遺物 (第17図)

14～16は弥生土器で混入品である。14・15は甕口縁部片で、いずれも逆「L」字状の口縁をもつ。磨滅と器面剥離のため調整不明。復元口径は14が29.0 cm、15が31.0 cm。16は器台片。全体に磨滅著しく調整不明。復元底径10.2 cm。

17・18は須恵器。17は須恵器片。内外面ともヨコナデ調整。18は坏の底部小片。底部から直線的に外方にのびる体部をもつ。全体に磨滅著しく調整不明。

19は輸入磁器で、口禿の白磁坏。胎土は淡灰白色で黒色粒を含む。内外面とも施釉するが、底部外面は釉の垂れが多く見られる。復元口径11.0 cm、器高3.0 cm、復元底径6.8 cm。

20は近世陶器で小型壺の口縁であろう。内外面ともヨコナデ調整。復元口径7.0 cm。

7号溝 (第3図)

調査区東半に位置する南北溝。6号溝と平行にのび、5号溝・溜り状遺構より新しい。長さ16.2m、幅0.9m、深さ0.15mを測る。埋土は暗褐色粘質土である。図示した遺物のほかに、龍泉窯系と思われる青磁片が出土している。

出土遺物 (第17図)

21は須恵器の壺高台片。外方に踏ん張るようにのびる高台で、長頸壺のものであろう。外面はヨコナデ調整、内部は雑なナデ調整。

22・23は瓦器碗片。22は全体に磨滅して調整不明。復元口径17.0cm。23も磨滅著しく、高台付近がヨコナデ調整であるほかは調整不明。復元高台径7.2cm。

8号溝 (第3図)

調査区西半に位置する東西溝で、西端が鉤型に南へ曲がる。6号溝より新しい。長さ12.0m、幅0.4m、深さ0.15mを測る。レンガ片が出土しており、ごく新しい溝である。やはり畦畔に伴う溝であろう。図示した遺物のほかに白磁片、近世陶磁片が出土している。

出土遺物 (第17図)

24は弥生土器の甕口縁部小片で混入品である。逆「L」字状口縁。磨滅著しく調整不明。

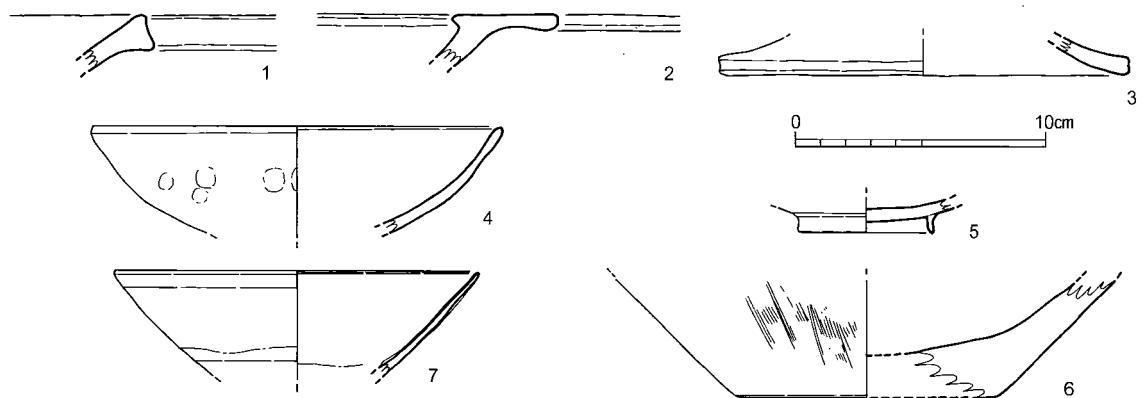
25は須恵器の坏口縁部小片で混入品である。内外面ともヨコナデ調整。

9号溝 (第3図)

調査区北東隅に位置する東西溝。堀跡と平行にのび、途中で堀跡と合流する。長さ6.0m、幅1.1m、深さ0.4mを測る。後述する堀に関連する溝であろう。埋土は灰褐色粘質土である。土器片が出土したが小片のため図示できない。

10号溝 (第3図)

調査区東半、中央付近に位置する東西溝。長さ24.5m、幅0.5～0.9m、深さ0.25mを測る。埋土は暗褐色粘質土である。



第18図 10号溝出土土器実測図(1/3)

出土遺物 (第18図)

1～3は弥生土器。1は壺口縁部小片。磨滅著しく調整不明。2は鋤先状口縁の高坏坏部片。全体に磨滅が進んでいるが、外面にわずかにハケメが見とめられる。また、口縁の内側突出部の直下に丹とヨコナデ調整の痕跡がかろうじて残る。3は高坏脚部片。全体に磨滅して調整不明。

4・5は瓦器椀片。4は体部中位でわずかに屈曲する。全体に磨滅しており、指頭痕がわずかに見とめられるのみで調整は不明。復元口径17.0 cm。5は底部片。反り気味の低い高台がつく。外面は高台部をヨコナデ調整、底部をナデ調整。内面はミガキ調整するが、磨滅気味でミガキの単位は不明。復元高台径5.6 cm。

6は土師質の鉢である。体部外面に細かいハケメがかろうじて残る以外は、磨滅して調整不明。復元底径11.0 cm。

7は輸入磁器で白磁椀。胎土は淡灰色でやや粗く、釉は淡灰色で、体部下半まで薄くかかる。復元口径12.0 cm。

11号溝 (第3図)

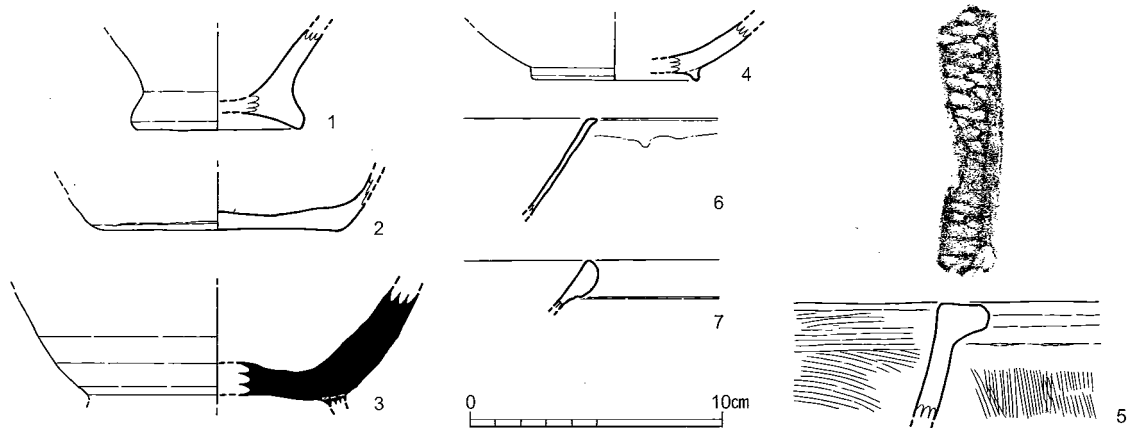
調査区東半、北壁寄りに位置する南北溝。6・7号溝と平行にのびる。堀跡より古い。長さ4.6m、幅0.5 m、深さ0.1 mを測る。方向が6・7号溝と一致すること、埋土の状況が似ることから、同時期、同様の性格の溝と考えられる。少量の土器片が出土したが、小片のため図示できない。

12号溝 (第3図)

調査区東壁沿いに位置する南北溝。5号溝より新しく、パイプ埋設溝より古い。長さ9.5 m、幅0.5 m、深さ0.05 mを測る。埋土は暗褐色粘質土である。現在の町道に平行し、2号溝と埋土等の状況が似ることから、この溝も畦畔あるいは土地区画に伴う溝であろう。遺物は出土していない。

溜り状遺構 (第3図)

調査区東半に位置する。北側は溝になり、調査区外へのびる。7号溝より古く、5・6号溝より新しい。溜り部分の径は4.2 m、深さ0.8 m、溝部分の長さは12.0 m、幅2.4 m、深さ0.75 mを測る。埋土は灰褐色粘質土で、川原石が多く含まれていた。北側にのびる溝から水が流れ込み、小さな池になっていたようである。土器のほかに石鍋、磨り石 (第24・25図) が出土している。



第19図 溜り状遺構出土土器実測図(1/3)

出土遺物 (第19図)

1は弥生土器の甕底部片。底部は上げ底で、全体に磨滅して調整不明。復元底径7.3cm。

2は土師器の無高台坏の底部片。底部外面に板状圧痕がみとめられるほかは、磨滅により調整不明。復元底径10.2cm。

3は須恵器壺の底部片。長頸壺であろう。体部外面は回転ヘラ削り、底部外面はナデ調整、高台部はヨコナデ調整。体部内面はヨコナデ調整、底部内面はナデ調整。

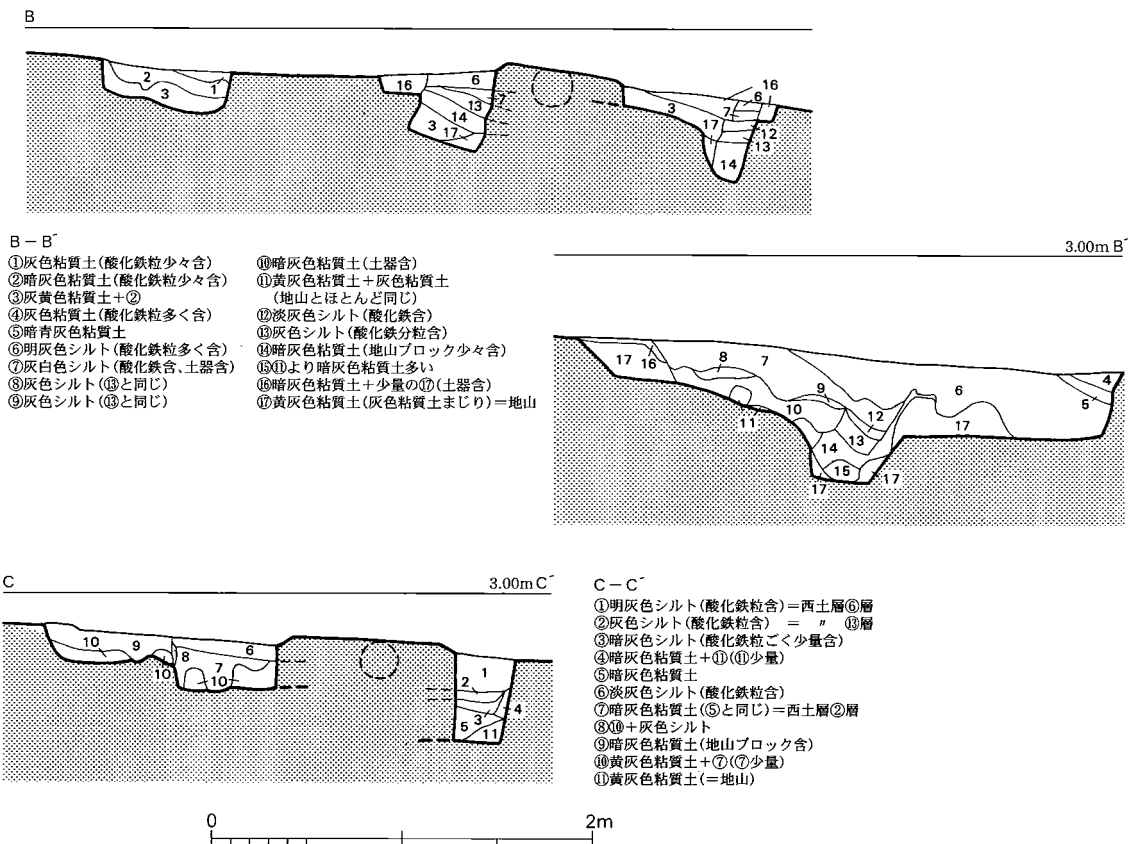
4は瓦器椀の底部片。断面三角形の低い高台をもつ。器壁がやや厚い。全体に磨滅して調整不明。復元高台径6.8cm。

5は鍋の口縁部片。口縁部はナデ調整し、上部に縄目の圧痕が残る。体部は内外面ともハケメ調整である。破面が被熱により、赤変している。

6は輸入磁器で白磁椀の口縁部片。口縁端部を平らにつくる。胎土は灰色で密、釉は灰褐色で全体に薄くかかるが、口縁下に垂れがみられる。7は近世磁器の白磁椀口縁部片。口縁端部を玉縁状につくる。胎土は淡黄褐色で粗い。釉は黄灰色で薄くかかる。

堀跡 (第3・20図)

現在調査区北側に隣接する堀の、コンクリートで護岸する以前の落ち際をほぼ調査区北壁に沿って検出している。現在の堀は調査区中央付近で鉤型に曲がるが、この部分で護岸以前の落ち際は大きく南に張り出す。この張り出し部から西の堀跡はほぼ完掘している。東側は一部しか掘削していないが、状況は西側と同様である。



第20図 堀跡土層図(1/40)

堀跡は約0.5 mの深さだが中ほどで一段深くなり、調査区北壁付近では最深部で深さ約1.3 mになる。堀跡の落ち際に沿って、幅0.5～0.7 m、深さ0.2～0.5 mほどの溝が数条走る部分がある。溝の壁はほぼ直立し、底面が平らで人工的に掘削されたものである。埋土は共通しており、灰色シルト、暗灰色粘質土を中心とする。堀跡の内側の溝状に深い部分とも埋土が共通しており、同時期に埋まっていることから、堀跡と関連している可能性が高い。遺物が比較的多かった溝についてZ-1～5と番号をふり、遺物を紹介している。12世紀代の遺物が中心で、この時期に埋没したと思われる。溝の掘削目的としては、調査地周辺は地山が粘質土で水に濡れると非常に滑りやすく危険なため、溝に水を引き込むことでより作業の安全性を高めるためではなかったかと考えている。木材で足場が作られていてもよいと考えるのだが、調査地内においてそれらしい痕跡は見出せなかった。

近所の60代の方は、子供の頃張り出し部で水汲みをしたことを覚えているそうである。また、現在、調査地ならびに周辺の水田は調査区北東隅近くに設置されているポンプで堀の水を汲み上げ、パイプを通じて各水田に配水しているが、柳川市内でポンプが普及し始めるのが昭和30年代である。近所の方のお話と合わせて考えても、堀の護岸工事は昭和30年代頃に行われたと思われる。

遺物は弥生土器から近世陶磁まで出土しているが、本調査地で検出した他の遺構から出土した遺物の時期の範囲内に納まる。土器のほかに石庖丁、石鍋（第24図）が出土している。

堀跡出土遺物（図版10、第21・22図）

- 1～3は弥生土器。1は壺の底部片である。内外面とも磨滅著しく調整不明。復元底径8.4 cm。
- 2は甕の口縁部片。内側に大きく内傾するが、口縁部はあまり外方へのびない。磨滅著しく調整不明。
- 3は甕の底部片。底部は厚く、上げ底である。全体に磨滅著しく調整不明。
- 4～10は土師器。4はほぼ完形の小皿。体部は内外面ともヨコナデ調整、底部内面は一定方向のナデ調整。底部外面はヘラ切り離し後未調整で、板状圧痕が残る。口径12.25 cm、器高2.2 cm、底径7.8 cm。5は無高台の坏。体部は内外面ともヨコナデ調整、底部内面は一定方向のナデ調整。底部外面はヘラ切り離し後未調整で、板状圧痕が残る。体部内面と底部外面の一部が赤変。また、底部外面の一部が黒変。口径12.5 cm、器高3.5 cm、底径8.0 cm。
- 6は小型甕の口縁部片。内外面ともヨコナデ調整。復元口径17.2 cm。7は口縁部が緩く外反する。口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面は粗いハケメ調整。口縁部内面は粗いハケメ調整。体部内面はハケ状工具でナデ調整するが、一部ヘラ削りしている。内外面とも指頭痕が残る、全体に雑な作りである。復元口径26.4 cm。8は口縁部が大きく短く外反する。体部外面に粗いハケメが残るほかは、磨滅のため調整不明。復元口径27.0 cm。
- 9は甑の口縁部片で、屈曲せずに外方に開く。体部内面をヘラ削りするほかはヨコナデ調整。復元口径27.4 cm。10は甑の把手片。ナデ調整。
- 11～16は須恵器。11は蓋で、つまみ部を欠失。口縁部内面から体部外面はヨコナデ調整、天井部内面は不定方向のナデ調整。天井部外面は回転ヘラ削り。復元口径15.6 cm。
- 12は無高台坏の底部片。底部から体部が直に立ち上がる。体部は内外面ともヨコナデ調整、底部内面はヘラ切り離し後未調整。ヘラ記号あり。底径6.5 cm。13は無高台坏。口縁部は屈曲し、短く内湾気味に引き出す。体部内外面はヨコナデ調整、底部内面は不定方向ナデ調整。底部外面はヘラ切り離し後ナデ調整。復元口径16.0 cm、器高4.4 cm、復元底径10.2 cm。14は低い断面台形の高台をもつ底部片。体部内外面と底部内面はヨコナデ調整、底部外面はナデ調整。復元高台径9.2 cm。



第21图 堀跡出土土器实测图①(1/3)

15は壺の口縁部片で、内外面ともヨコナデ調整。16は肩に二つ耳がつく壺。長頸壺か。体部外面は正格子のタタキ後に雑なヨコナデ調整。頸部内面はヨコナデ調整、体部内面は雑なナデ調整で粘土継ぎ目がみとめられる。復元肩部径18.0 cm。

17～19は黒色土器碗。17は体部外面に螺旋状に沈線が巡るが、磨滅のため調整は不明。内面はミガキ調整。18の体部外面はヨコナデ後ミガキ調整、底部外面はナデ調整。内面はミガキ調整である。復元高台径7.8 cm。19はほぼ完形。体部外面はヨコナデ調整、底部外面はナデ調整。内面はミガキ調整だが、磨滅してミガキの単位は不明。口径14.6 cm、器高7.8 cm、復元高台径8.3 cm。

20・21は瓦器碗の底部片。20の高台はやや外方へ開く。外面はヨコナデ調整、内面はミガキ調整。復元高台径6.5 cm。21はごく低い高台をもつ。全体に磨滅して調整不明。復元高台径6.7 cm。

22は土師質土器で鍋である。口縁部に粘土紐を貼付して肥厚させ、ナデで仕上げるが雑なつくりである。体部外面はハケメ調整の上に指頭痕が多く残る。体部内面はハケメ調整。内面に炭化物が付着する。

23～27は輸入磁器である。図示した以外にも同安窯系青磁碗片・小皿片、龍泉窯系青磁碗片が出土している。

23は白磁碗の口縁部片。口縁端部を平らにつくる。胎土は淡灰色でやや粗い。釉は淡黄褐色で薄くかかる。復元口径16.0 cm。24は玉縁をもつ白磁碗の口縁部片。胎土は淡灰白色でやや粗い。釉は淡青色で薄くかかる。

25は青磁小皿片。底部内面と体部の境に沈線が巡る。胎土は淡灰色で粗く、釉は灰味をおびた淡青色で薄くかかる。26は龍泉窯青磁碗。口縁部内面に2条の沈線を巡らし、体部内面に片切り彫りの文様を施す。胎土は灰色で密、釉は灰緑色でやや厚くかかる。27は同安窯青磁碗。体部内面に1条の沈線を巡らし、文様を施す。体部外面には櫛目を入れる。胎土は黄白色で粗く、釉は褐色で薄くかかる。復元口径16.0 cm。

28～31は近世陶磁器。28は小坏の底部片。内外面に施釉し、高台畳付き部のみ露胎。胎土は黄白色で、釉は淡い黄白色である。高台径5.0 cm。29は小型の壺の口縁部片。内外面ともヨコナデ調整。胎土は須恵質で、釉はごく薄くかかる。復元口径5.6 cm。30は白磁の小坏片。胎土は淡灰白色で密、釉は淡灰色。31も白磁の小坏底部片。胎土は淡灰白色でやや粗く、釉は白色で全面に施釉する。

32は平瓦片である。側面はヘラ切り、端面は粘土板切り出し後未調整。凹面、凸面ともにヘラ状工具によるナデ調整。全面黒色に燻している。

溝部出土遺物 (第22図)

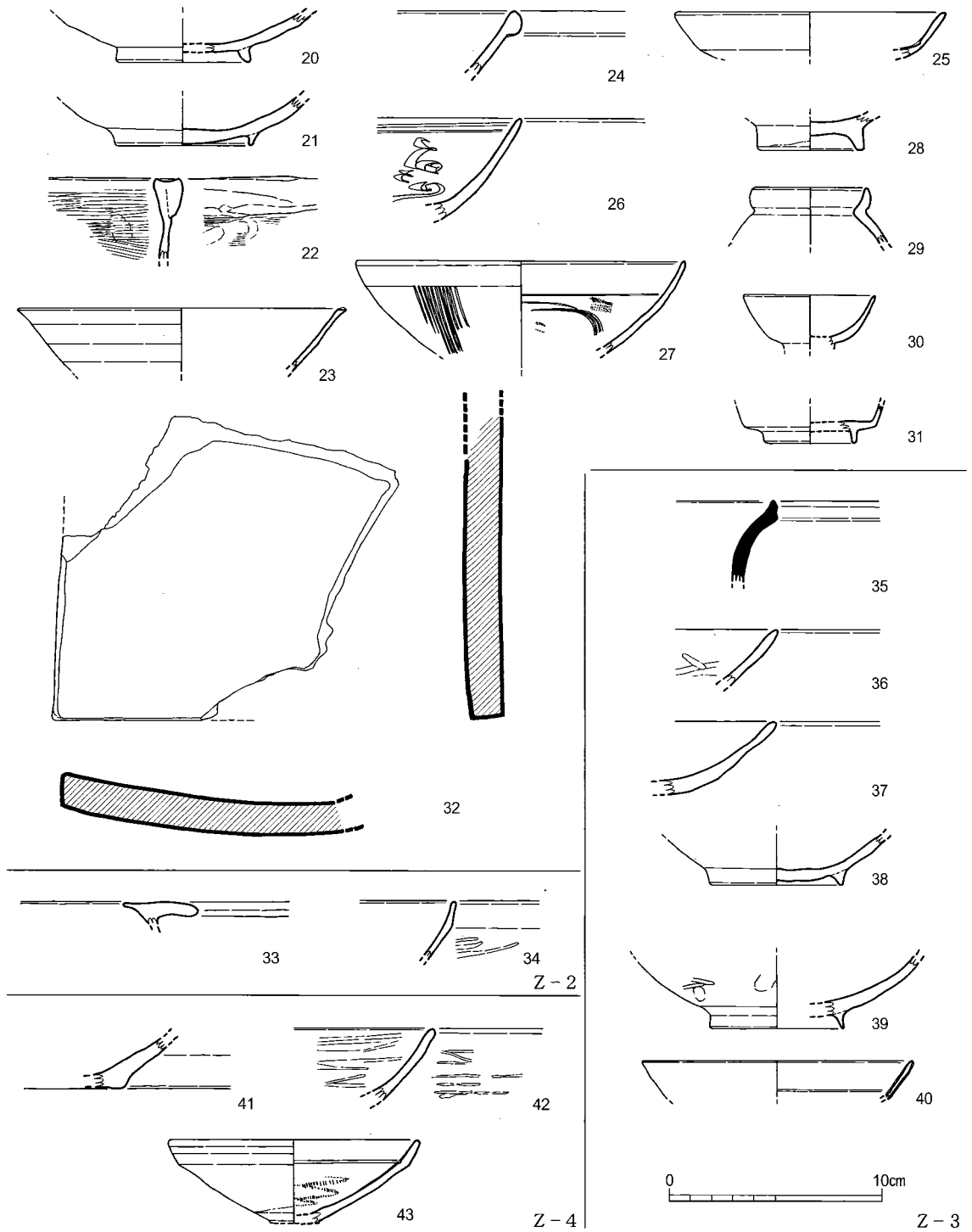
出土遺物は、出土量の割には小片が多く図示できるものは少ない。

Z-2から出土したのは33・34である。33は弥生土器の甕口縁部片で、鋤先状口縁をもち、口縁端部がやや下がる。磨滅著しく調整不明。内面から口縁端部にかけて被熱のため赤変。34は瓦器碗片で、口縁部は内外面ともヨコナデ調整。体部内面はミガキ調整だが単位は不明。体部外面はヨコナデ後雑なミガキ調整。

Z-3からは35～41が出土している。35は須恵器壺口縁部片。ヨコナデ調整で、内外面とも灰を被っている。

36～39は瓦器である。36は内外面ともミガキ調整。37は内外面とも磨滅のため調整不明。浅い

器形になる。38は底部片で、体部は丸みをもって立ち上がる。内面はミガキ調整、体部外面はナデ調整。断面三角形の高台を貼付し、底部外面はナデ調整である。復元高台径6.6cm。39も体部は丸みをもって立ち上がる。内面はミガキ調整だが、磨滅のためミガキの単位は不明。体部外面は指頭痕が残り、雑なミガキ調整である。薄く、比較的高い高台を貼付する。復元高台径10.0cm。



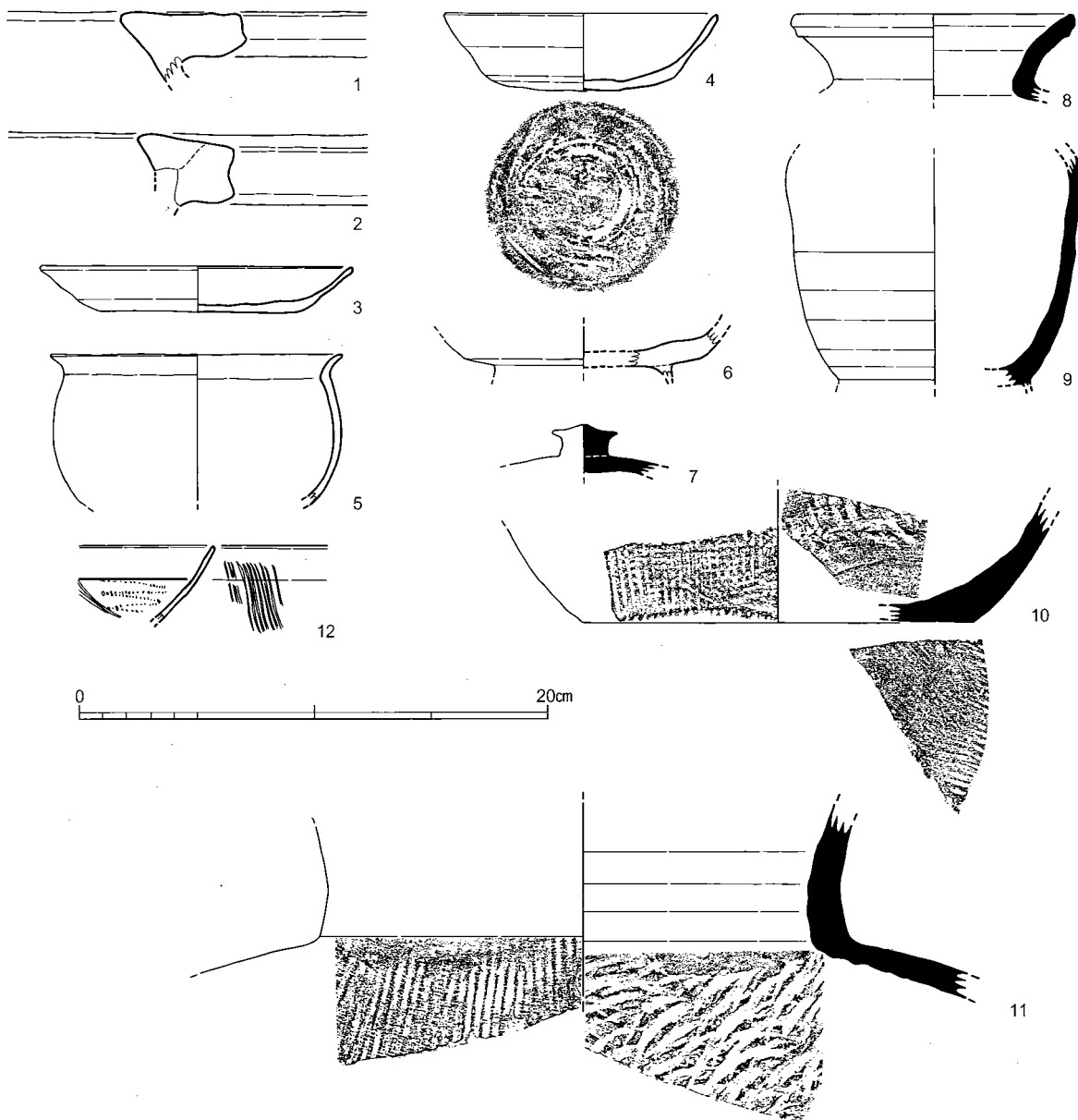
第22図 堀跡出土土器実測図②(1/3)

40は輸入磁器の青磁皿である。内面底部と体部の境に沈線が巡る。胎土は灰色で粗く、釉は灰味の淡青色である。残存部全面に施釉。復元口径13.2cm。

Z-4から41~43が出土した。41は磨滅著しく調整不明。42は瓦器碗片で、口縁端部を丸く仕上げる。口縁部は内外面ともヨコナデ調整、体部内面はミガキ調整である。体部外面はヨコナデ後雑なミガキ調整する。44は同安窯系青磁皿。口縁部下で屈曲し、以下回転ヘラ削りを行う。屈曲部の内面には沈線が巡る。内面には櫛状工具で施文する。底部はごくわずかししか残存しないが、体部との境は明瞭である。白磁皿にこれと近い器形のものがあり、底部はやや上げ底につくるようである。胎土は灰色でやや粗く、釉は緑灰色で体部下半まで施釉する。胎土は12.0cm、復元器高4.05cm、復元底径2.3cm。

その他の遺物

ここではピット・包含層出土土器、石製品について説明する。



第23図 ピット・包含層出土土器実測図(1/3)

ピット・包含層出土土器（図版10、第23図）

1は弥生土器大型甕の口縁部片。口縁部が内傾するが、内側へは殆ど突出しない。磨滅著しく調整不明。2もまた弥生土器大型甕の口縁部片。体部と粘土継ぎ目から剥離している。口縁部は短く、角張って仕上げる。磨滅著しく調整不明。いずれも包含層出土。

3～6は土師器。3は皿で、全面磨滅して調整不明。底部の状態から、ヘラ切り離しである。復元口径14.0cm、器高2.05cm、復元底径8.6cm。4は完形の坏。全体に磨滅して調整不明。底部外面はヘラ切り離しで、板状圧痕が残る。口縁部の一部が被熱のため赤変。口径12.2cm、器高3.5cm、底径8.2cm。包含層出土。5は小形の壺。磨滅著しく調整不明。口縁部から体部外面が被熱のため赤変。復元口径13.0cm。調査区中央付近、南壁に沿って設定した土層観察トレンチから出土した。6は高台坏の底部片。底部と体部の境がはっきりしている。全体に磨滅著しく調整不明。床土から出土。

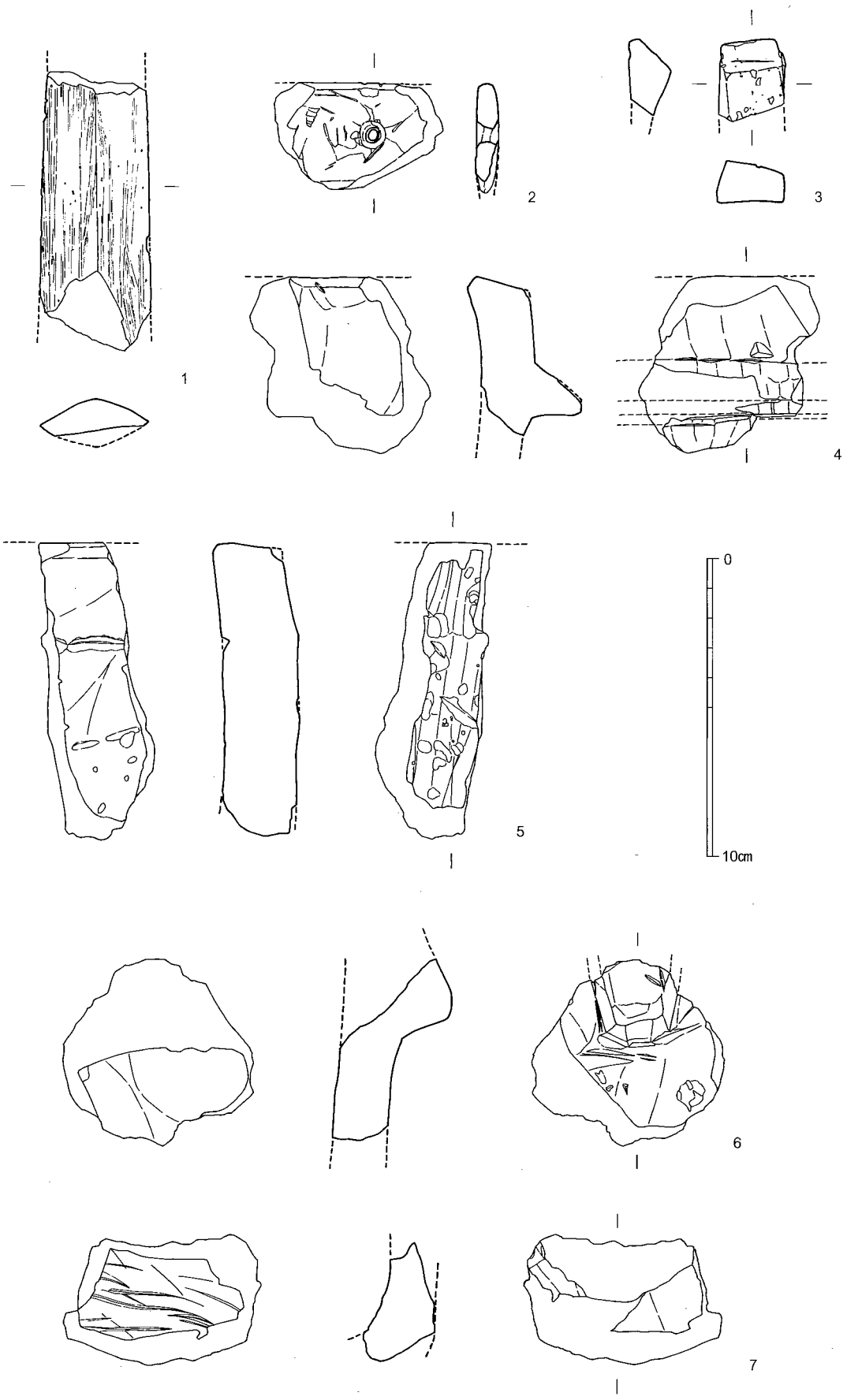
7～11は須恵器。7は蓋のつまみ部。外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整。包含層出土。8は壺の口縁部片。口縁部は内外面ともヨコナデ調整、体部内面はナデ調整。復元口径12.6cm。包含層出土。9は壺の体部片。肩は張らず、なだらかに体部に变化する。体部外面は上半をナデ調整、下半を回転ヘラ削り調整する。内面はヨコナデ調整である。高台がつくが、形状は不明。10は鉢であろう。外面は体部、底部とも正格子のタタキ痕が残る。内面は底部から体部下部にかけてはヨコナデ調整、体部上半は当て具痕が残る。復元底径17.4cm。11は甕。頸部は内外面ともヨコナデ調整、体部外面は直線タタキ。屈曲部内面をナデ調整し、体部内面は当て具痕が残る。

石製品（図版11・12、第24～26図）

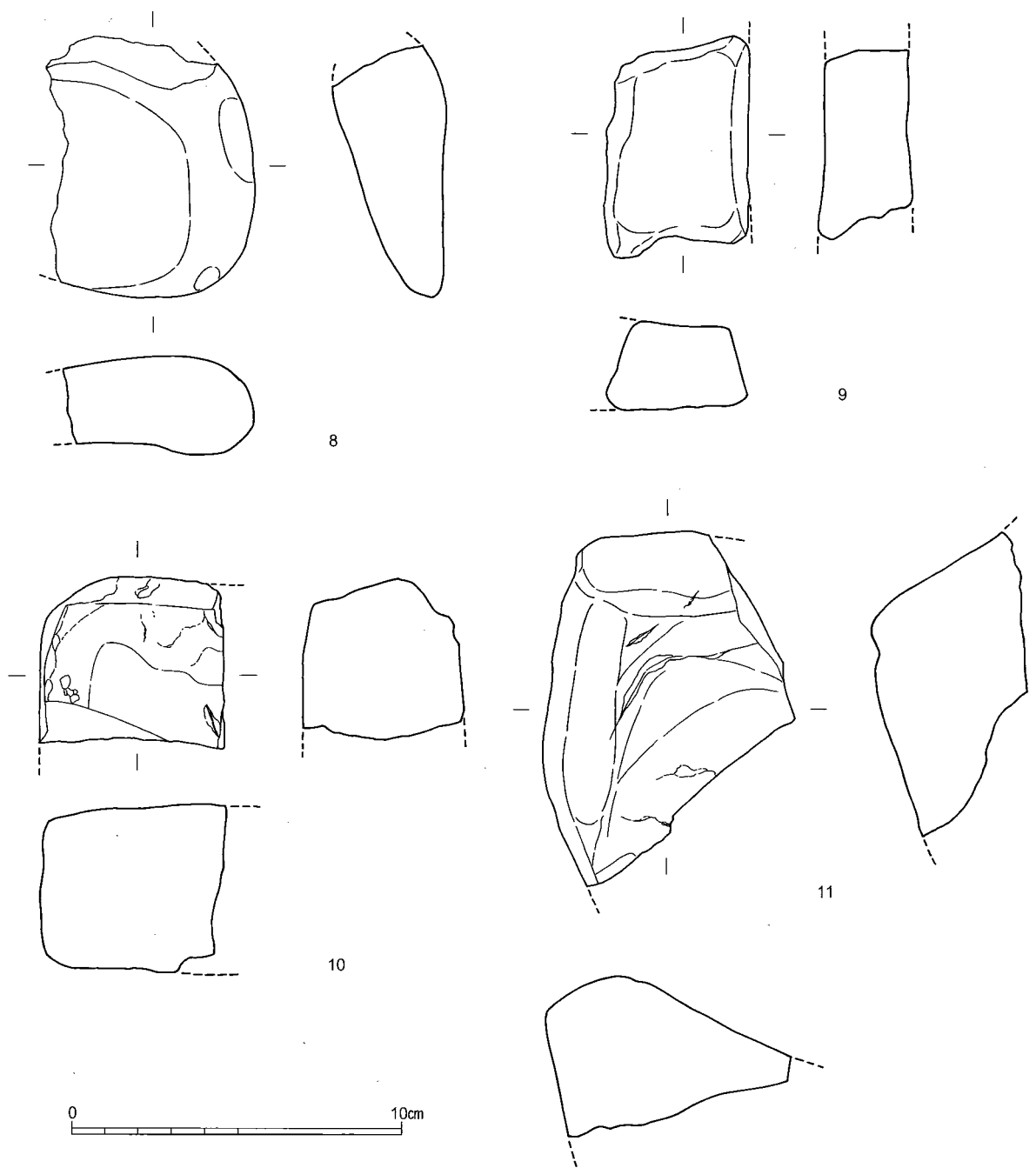
1は石剣片。上端と下端の幅がごくわずかしかわらないため、基部に近い部分の破片であると思われる。鏑、刃部とも鈍い。残存長9.35cm、最大幅3.6cm。凝灰石製。15号土坑出土。2は石庖丁片。全体に磨滅し、傷がおおいたため仕上げ面が殆ど残っていない。かろうじて仕上げ面が残っている面を表にして図化している。残存長5.6cm、残存幅3.6cm。粘板石製。堀跡出土。

3は滑石製品。石鍋の転用品と思われるが、用途は不明。全面にススが付着する。幅2.2cm、残存長2.5cm、最大厚1.4cm。18号土坑出土。

4～7は石鍋片。4は断面形が長台形の鏝をもち、口縁部が内湾する。一部不明瞭ながら、外面にはノミ痕が確認できるが、内面にはない。鏝の上面から体部にかけてススが付着している。厚さ1.7cm。溜り状遺構出土。5は鏝や把手がない桶形である。口縁部が若干内湾する。外面はよくノミ痕が残るが、口縁端部から内面は非常に滑らかでノミ痕はない。体部外面にススが付着している。厚さ2.5cm。堀跡出土。6は突起状の把手をもつ。把手の断面は長方形で、口縁部は内湾すると思われる。把手部分は擦れがすすんでおり基部にノミ痕が残るのみで、体部にもノミ痕はない。内面は残存部分全面に炭化物が付着している。ノミ痕はない。厚さ1.85cm。包含層出土。7は体部と底部の境部分の破片。外面はノミ痕が残り、ススが付着している。内面は筋状にノミ痕が残る。厚さ1.8cm。堀跡出土。



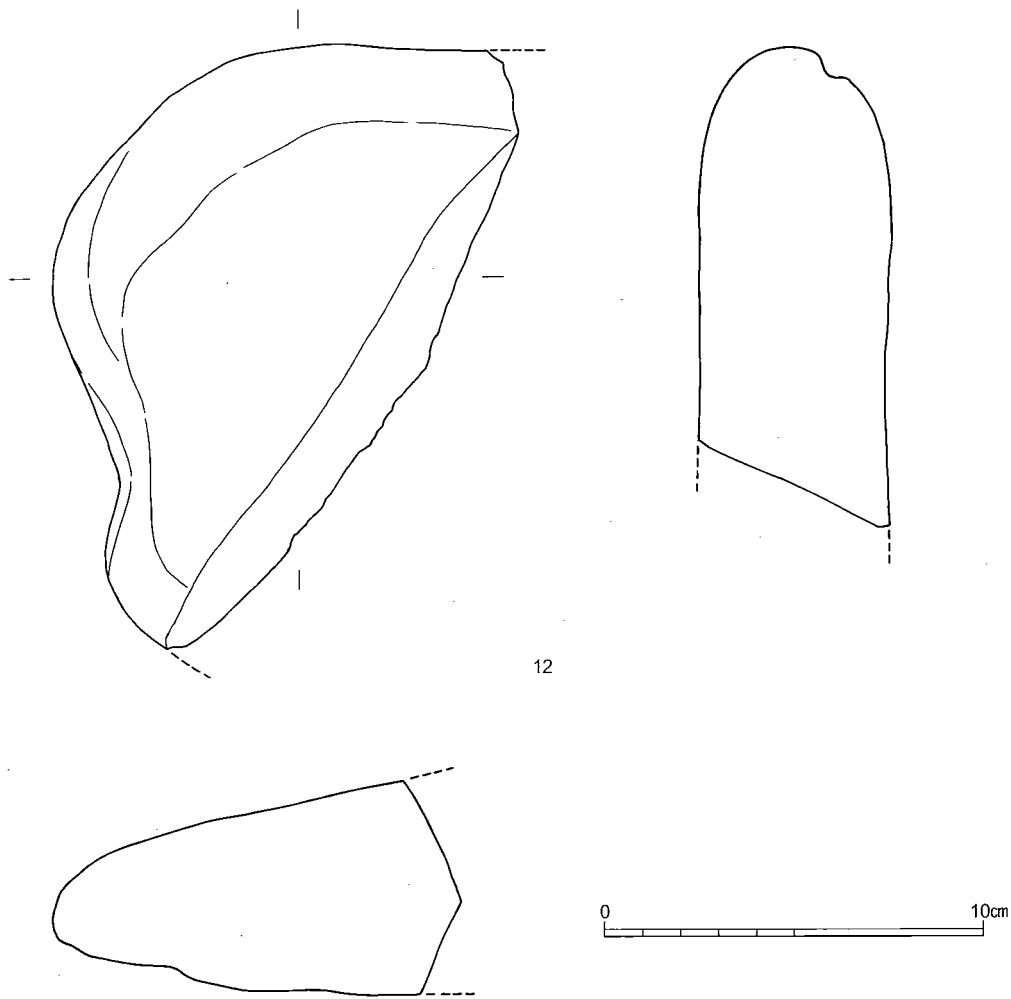
第 24 图 石製品実測図①(1/2)



第25図 石製品実測図②(1/2)

8は磨り石。廃棄後に欠けている。残存長6.9cm、残存幅6.2cm。安山石製。溜り状遺構出土。

9～12は砥石。9は粗砥用の砥石。表面と右側面をよく使い込んでいる。裏面には砥ぐ際についたと思われる傷がある。残存長6.8cm、残存幅4.4cm、厚さ2.6cm。砂岩製。18号土坑出土。10は表面、裏面、左側面の一部を使用している。残存長5.0cm、残存幅5.5cm、厚さ5.0cm。砂岩製。11は廃棄後に大きく欠けている。表面を最も使い込んでいる。残存長9.0cm、残存幅8.0cm。砂石製。ともに7号土坑出土。12は表裏面よく擦れており、砥石と思われる。残存長15.9cm、残存幅12.4cm、厚さ5.0cm。玄武石製。8号土坑出土。



第26図 石製品実測図③(1/2)

第4章 おわりに

本遺跡で検出された遺構の時期は5時期である。弥生時代中期、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、江戸時代以降である。

まず弥生時代中期の遺構は、9・11号土坑である。出土土器から弥生時代中期前半に相当する。

本遺跡の北西に位置する弥生土器の散布集中域が集落本体と考えられる。本遺跡の位置は集落縁辺部にあたり、検出遺構の少なさからも裏付けられる。

弥生時代集落の本体と思われる三島神社周辺には支石墓とおぼしき巨石や貝塚が点在しているが、未調査のため詳細は不明のままである。

支石墓と思われる巨石は柳川市周辺の市町村でも確認されている。大川市磯良神社の傍らの岩薬師、または磯良塚と呼ばれる五角形の巨石は支石墓である可能性が高く、同市藩境石近くの八幡神社境内に2基、城島町大字下林安永の水田中に3基の巨石の存在が指摘されている。註1調査された遺跡には大牟田市羽山台遺跡があり、標高14～17mの低丘陵上の甕棺墓群内に1基あり、下部構造は甕棺で中期初頭の年代が与えられている。註2

筑後川の対岸、佐賀平野にも支石墓は分布している。久保泉丸山遺跡、礫石B遺跡、香田遺跡など背振山地南麓の洪積世低台地上（標高約37m）に立地する、山ノ寺式併行期に現れ板付Ⅱ式併行期まで続く支石墓群と、南小路遺跡、西石動遺跡、船石遺跡、四本黒木遺跡など洪積世低丘陵や微高地上（標高10～20m）に位置し、甕棺墓地内に数基点在する支石墓とがある。後者は甕棺墓に支石墓の上部構造をもち、前期末から中期半ばまでみられる。前期末を境に立地、構造の変化がおきることが指摘されている。註3福岡県側の支石墓の特徴は後者と共通し、弥生時代前期末から中期半ばまでの間に営まれたと推測される。

九州において弥生時代貝塚は小規模ながら縄文時代貝塚とほぼ同数存在し、一定地域に集中する傾向を示す。筑後川下流域も集中地域の一つである。縄文時代貝塚も分布するが数は少なく、弥生時代前期後半に突如増加し、後期まで継続する。弥生時代初頭から前半の貝塚は玄海灘沿岸部に多く、弥生文化の南漸と軌を一にして貝塚形成が広がったとみられる。弥生貝塚が集中する地域は後背に広大な水田地帯が控えているという特徴をもち、農業生産力の増大に伴い、漁業集団析出の動きが進んだことを示すとの見方がある。製塩との関連性も指摘されている。註4

また、佐賀県側の弥生時代集落の有り様も前期末に画期があり、臨海低地部に定住的な集落が多数形成されるという。この集落を中心に急速に発展し、大規模集落へ成長する時期が中期前半である。註5筑後川下流域の弥生時代の様相を考えるにあたり、前期末の状況は注目される。蒲池地区もこの流れの中にあり、弥生時代前期末から集落が営まれ始めたと推測される。

古墳時代の土器は少量出土するものの、遺構の時期を決定付ける出土状況ではない。古墳時代は空白期間といえる。

奈良時代の遺構は1～3・5号土坑、1・5号溝である。5号溝の埋土からは水が流れた様子や滞水していた様子は認められない。用水路というより区画を意識した溝だろう。周囲の遺物散布の状況を考えると、本遺跡は区画外になるのであろう。2・3・20号土坑は遺物が出土していないが、埋土の状況が1・5号土坑と類似するので、当該期の遺構と判断した。1号土坑出土の土器は前代のもと思われるが、埋土状況が5号土坑と共通するので埋没の時期は当該期であると判断した。

平安時代の遺構は4・6～8・10・18号土坑である。7・8号土坑は、出土した土師器は全てヘラ切り離しであること、土師器碗と黒色土器碗の器形、技法が共通すること、瓦器碗が出土しないことから、10世紀代であろう。

4号土坑出土瓦器碗の高台の形状は不明だが、内面のミガキが密で、外面のミガキも本遺跡出土の瓦器碗の中では丁寧に行っている。18号土坑出土瓦器碗は灰釉陶器に似た形状の安定した高台をもち、内外面のミガキを比較的丁寧に行っている。両者とも瓦器碗としては古い様相を呈しており、12世紀前半代であろう。6号土坑は遺物が出土していないが、18号土坑と埋土の状況がよく似ていること、土坑の規模が同じくらいであることから当該期の遺構と判断した。10号土坑もまた無遺物だが、埋土の状況が6・18号土坑と似るので当該期と考えている。

さて、三瀧荘の構成村落として史料上に蒲池村の名が確認できるのは永仁4（1296）年、13世紀末である。既に一定の生産力を有する集落として成立していたことを示すが、その成立時期が不明であることは第2章で述べた。本遺跡はこの時期においても集落縁辺部であることに変わりはないが、遺構の位置に偏りがみられなくなる。前代に比べ、混入品も含めてだが遺物の量も増加する。このことを集落の拡大化、活動の活発化の表れと見るのは飛躍が大きいだろうか。

堀跡については、下限は昭和30年代のポンプの普及、灌水器の設置とほぼ同時期であろう。堀と関連して掘削された溝から出土した遺物は12世紀代のもので、この時期に埋没したと思われる。堀跡の内側の溝状に深くなっている部分もまた、これら溝と同様の堆積状況を示している。このことから、少なくとも堀跡は12世紀には既に掘削されていたと考えられる。

以上の本遺跡の状況から、この時期に堀の整備と田地の再開発が進んだと考えられる。11世紀は全国的に農地の拡大が図られ多くの荘園が成立した時期であり、13世紀末の蒲池村の前身集落が10世紀に成立し、平安期を通じて発展、拡大した可能性は高い。

鎌倉時代の遺構は17号土坑である。17号土坑は土師質の鉢が出土しており、13世紀まで下ると思われる。前代に再開発された結果、田地として営まれたため遺構、遺物が少ないと思われる。

江戸時代以降の遺構は13・16・19号土坑、2・3・6～8・10～12号溝、溜り状遺構である。いずれの遺構も瓦器椀や輸入磁器など中世の遺物が多く出土しているが、近世陶磁器片が含まれるため当該期の遺構と判断した。14・19号土坑、10号溝から同一個体の白磁片が出土しており、同時期に埋没したと考えられる。15・16号土坑からは土坑自体の時期を示す遺物は出土していないが、埋土の状況から当該期とした。

堀跡からは実に多様な時期の遺物が出土したが、本遺跡検出の遺構の時期と概ね合致しており、本遺跡と同時期の遺構が周辺に広がっていたことは確実である。本遺跡は各時代を通じて集落縁部である。積極的に田地であったことを示す遺構、遺物はないが、田地として利用されていたと考えるのが自然であろう。

註

- 1 『酒見貝塚』大川市文化財調査報告書第2集 大川市教育委員会 1994
- 2 三島 格 高島忠平 佐藤伸二 永井昌文 「羽山台遺跡調査概報」(大牟田市文化財調査報告書第1集) 『九州考古学』35 九州考古学会 1968
『羽山台遺跡』大牟田市文化財調査報告書第6集 大牟田市教育委員会 1975
『羽山台遺跡』大牟田市文化財調査報告書第16集 大牟田市教育委員会 1982
『羽山台遺跡Ⅳ』大牟田市文化財調査報告書第39集 大牟田市教育委員会 1991
- 3 『久保泉丸山遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 佐賀県文化財調査報告書第84集 佐賀県教育委員会 1986
『香田遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(2) 佐賀県文化財調査報告書第57集 佐賀県教育委員会 1981
『四本黒木遺跡』神埼町文化財調査報告書第6集 神埼町教育委員会 1980
- 4 山崎純男 「有明海・不知火海沿岸の貝塚」『ミュージアム九州』第52号 博物館等建設推進九州会議 1996
山崎純男 「九州地方の弥生時代貝塚」『月刊考古学ジャーナル』No.336 ニューサイエンス社 1991
- 5 徳富則久 「弥生～古墳時代の佐賀平野平坦低地の集落」『ミュージアム九州』第52号 博物館等建設推進九州会議 1996

圖 版



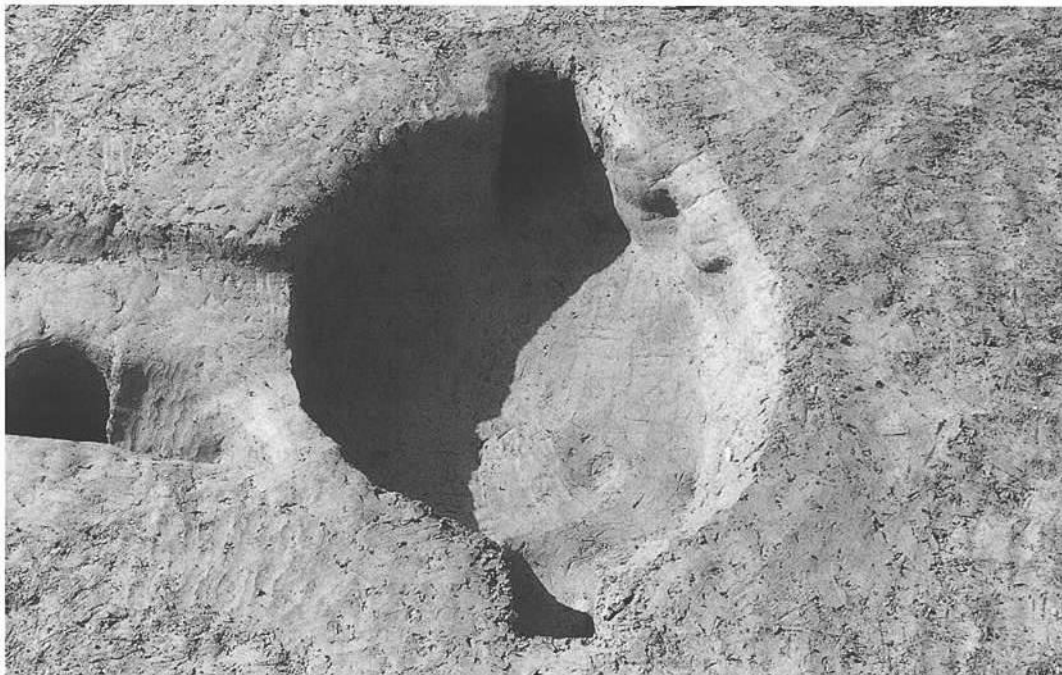
調査区全景
(空中写真 右が北 合成)



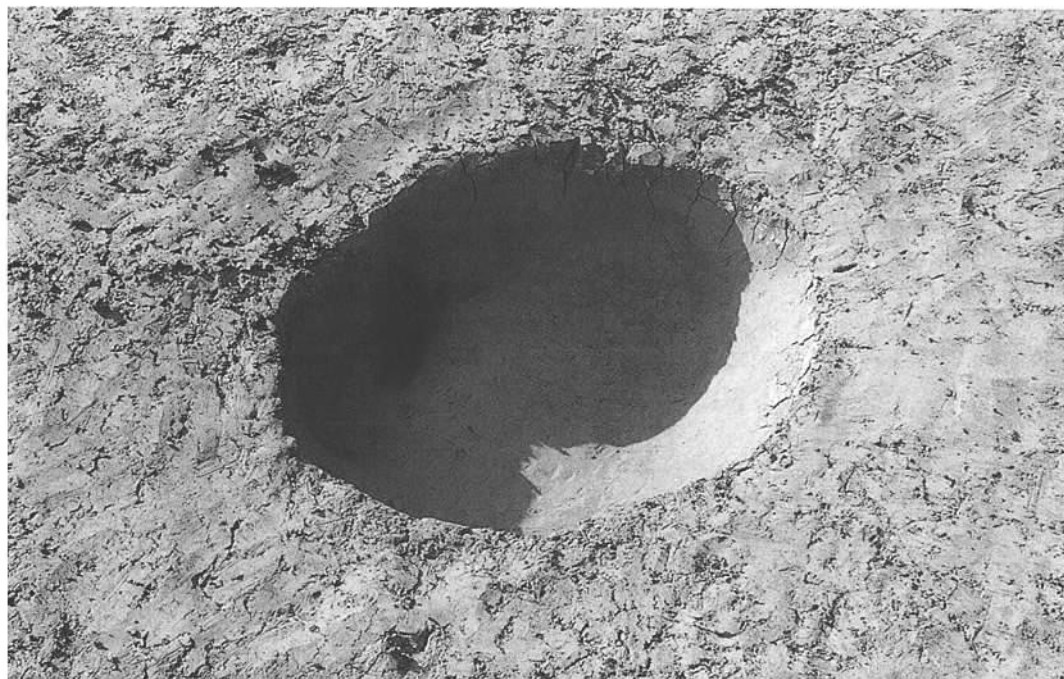
調査区遠景(西を望む)



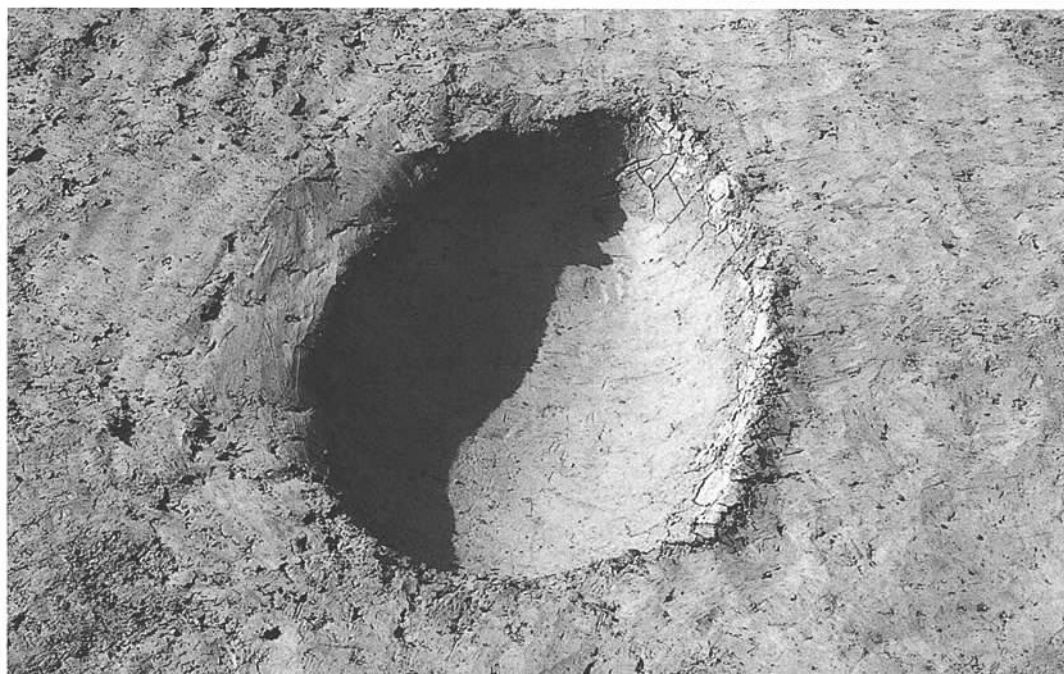
1号土坑(東から)



2号土坑(東から)



3号土坑(東から)



4号土坑(東から)



5号土坑(北から)



6号土坑(東から)



7号土坑土層



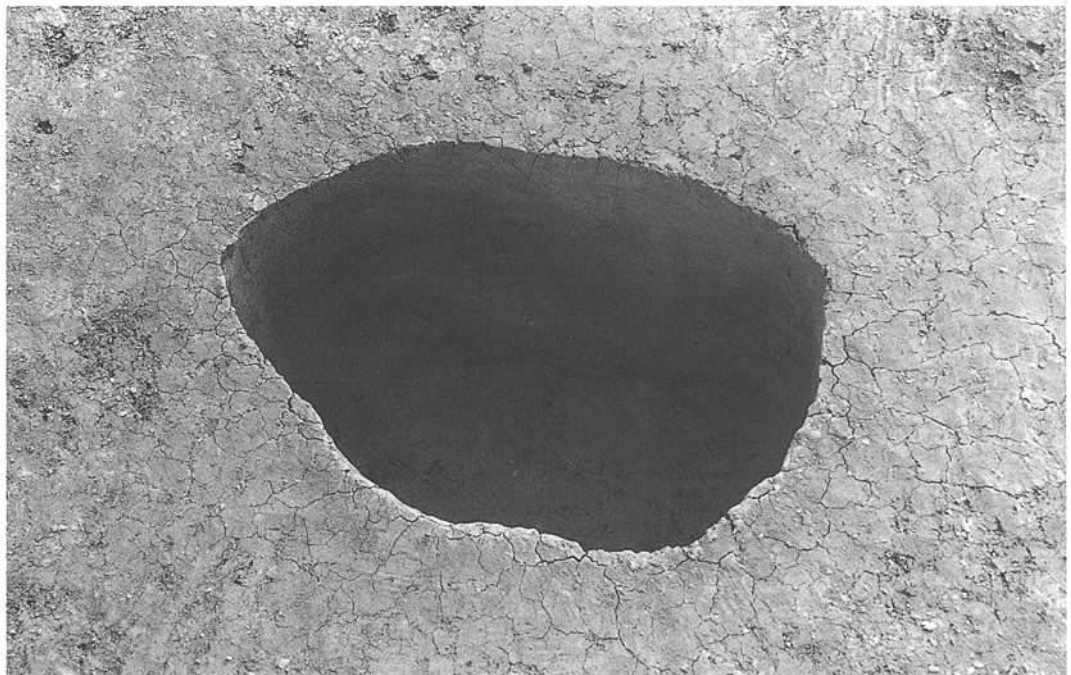
7号土坑(東から)



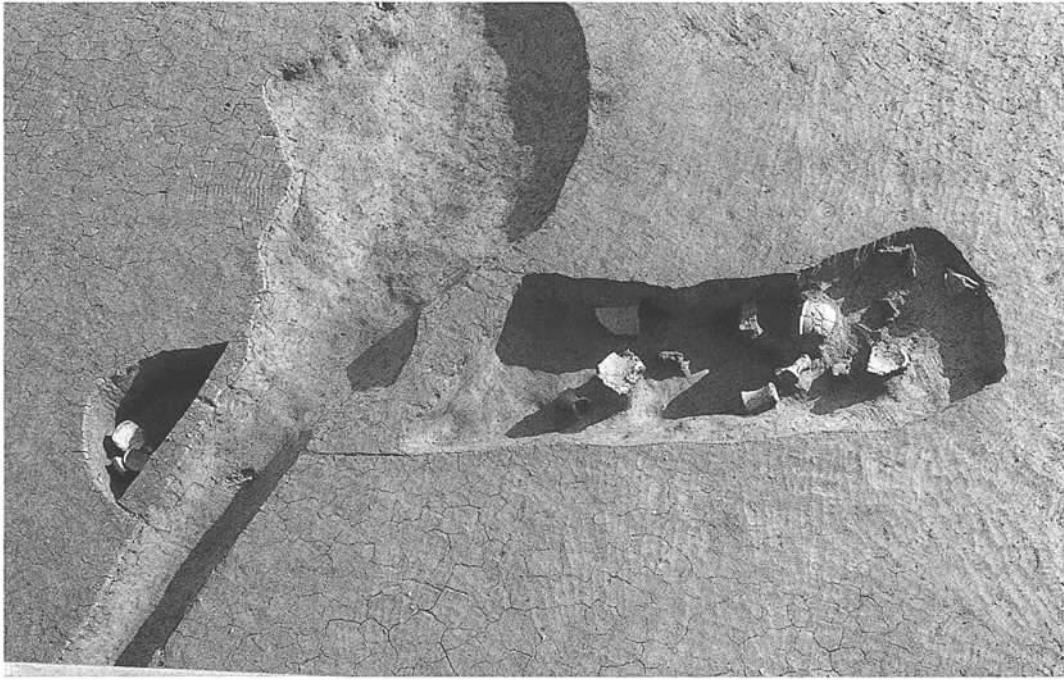
8号土坑(南から)



9号土坑(北から)



10号土坑(北から)



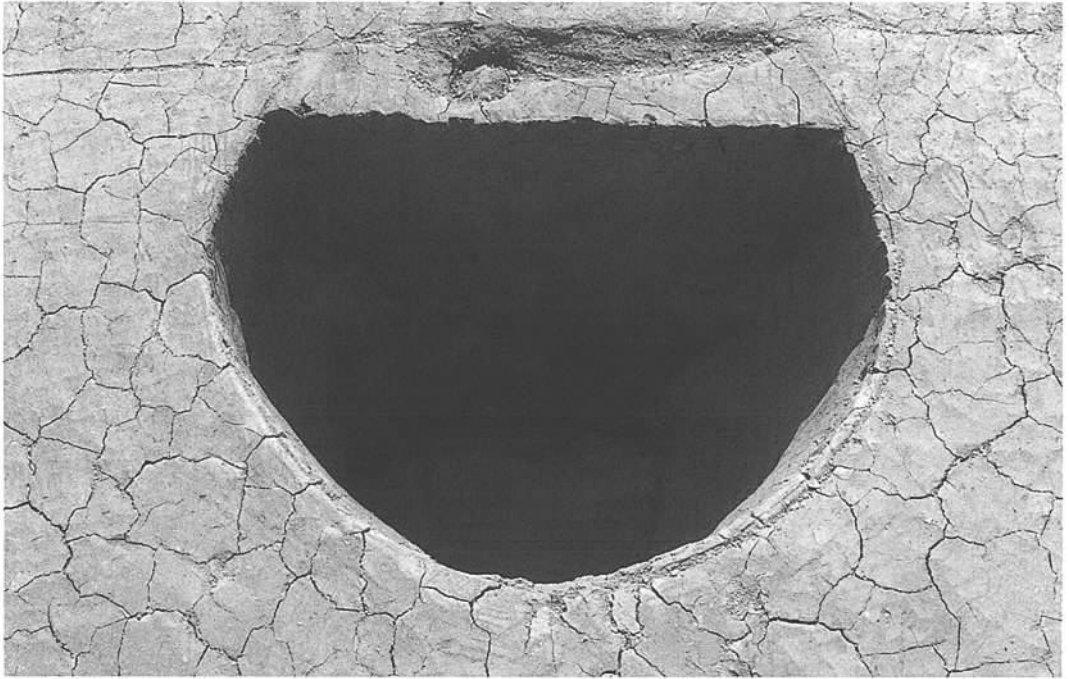
11号土坑(北から)



12号土坑(東から)



13号土坑(北から)



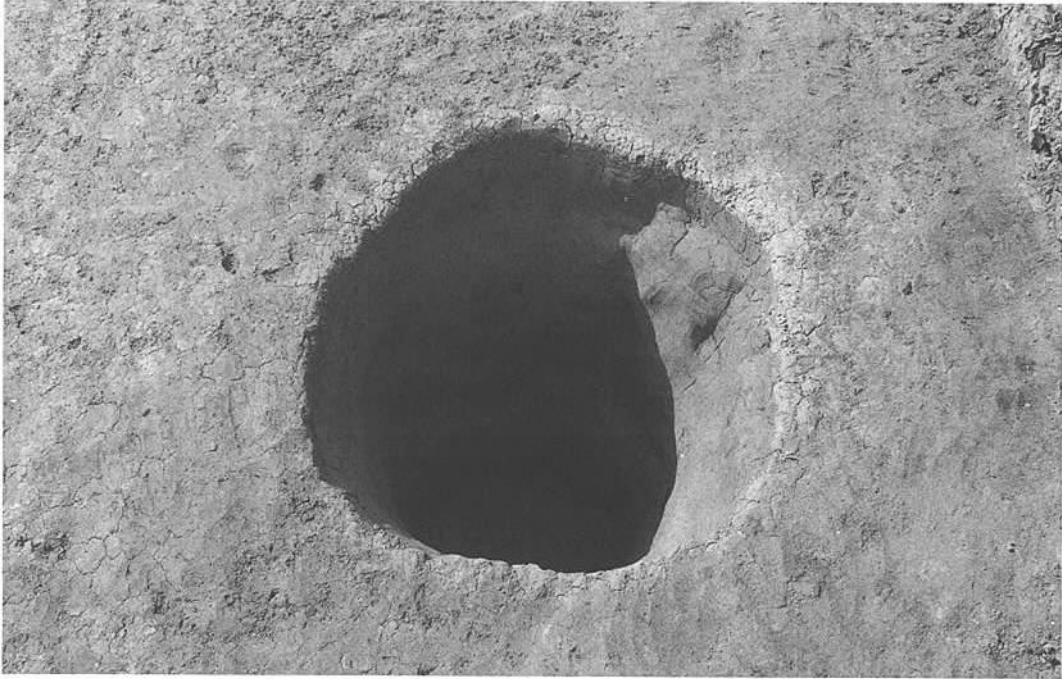
14号土坑(北から)



15号土坑(北から)



16号土坑(南から)



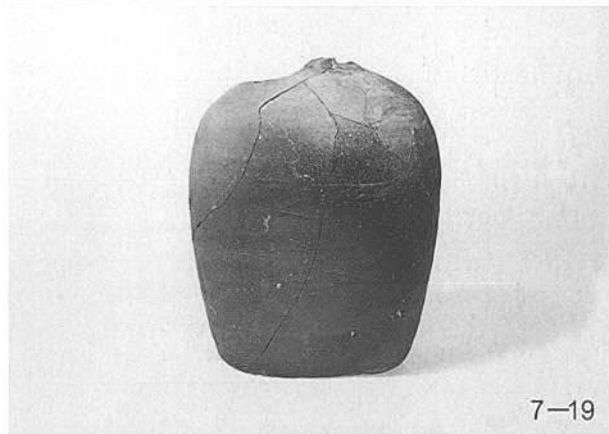
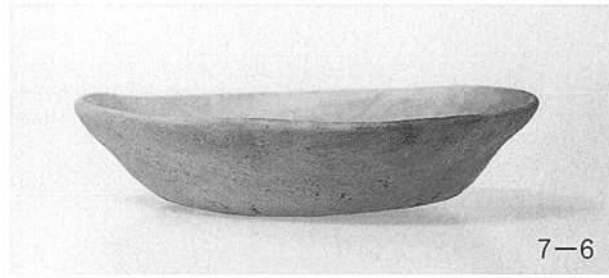
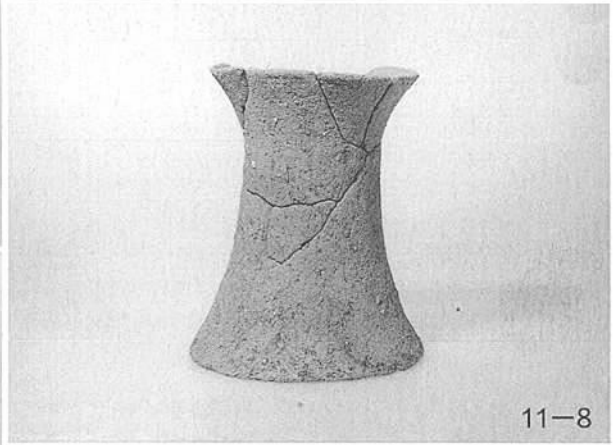
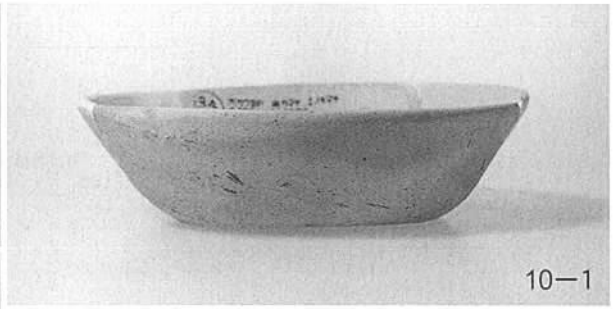
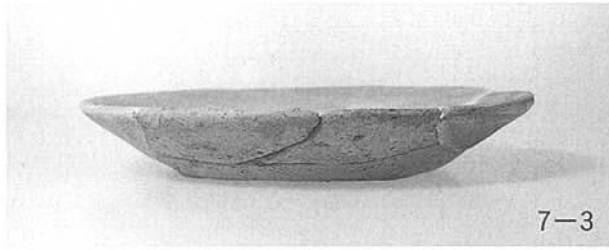
17号土坑(東から)



18号土坑(東から)



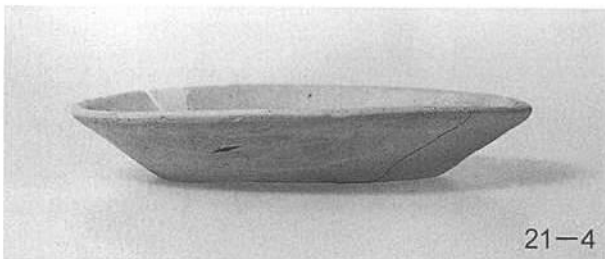
19号土坑(東から)



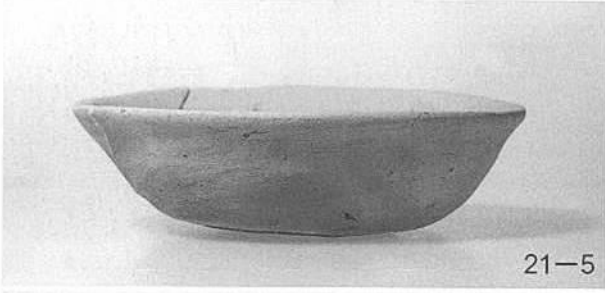
土坑出土土器



|



21-4



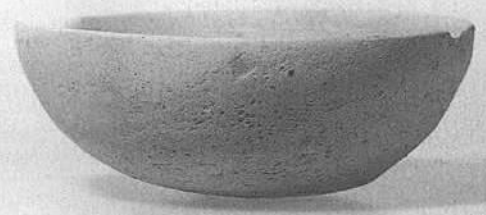
21-5



13-17



21-13



17-1



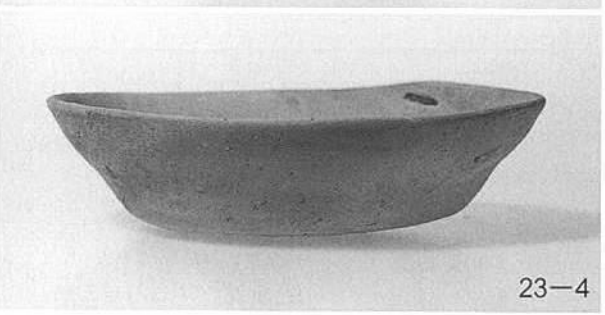
21-16



17-8

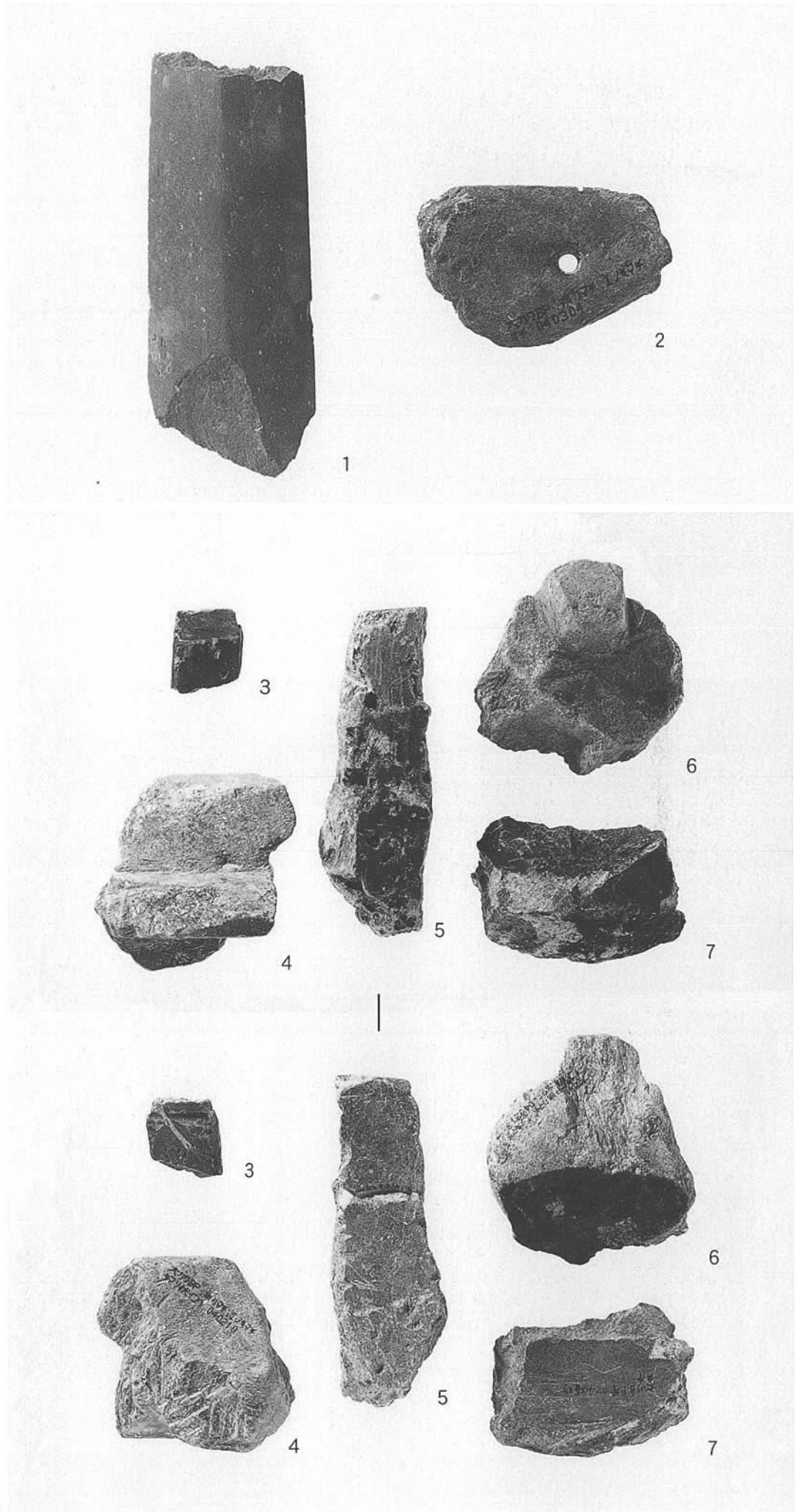


21-19



23-4

土坑·溝·堀跡·包含層出土土器



出土石製品①



8



9



10



11



12

報告書抄録

ふりがな	ひがしかまちえのきまちいせき							
書名	東蒲池榎町遺跡							
副書名	福岡県柳川市東蒲池所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	1							
編著者名	今井涼子							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7-7							
発行年月日	西暦2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしかまち えのきまちいせき	福岡県柳川市 東蒲池 21-2、 24-1～3、 25、26、 29～31、 32-1、34-1、 35-1、36、 39、40、 40-3・4	402079		33° 10′ 47″	130° 24′ 26″	2003.10.5～ 2004.3.26	5,700	道路建設 (有明海 沿岸道路 大川 バイパス)
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
東蒲池 榎町遺跡	集落	弥生時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 江戸時代		土坑、溝、堀跡		弥生土器、須恵器、 土師器、陶磁器、 黒色土器、瓦器、 石製品		

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 16	登録番号 9

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集

東蒲池榎町遺跡

平成17年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 (有)プリンティングコガ
福岡県大川市大字一木736-5